くまもとアートポリスシンポジウム報告書

都市にデザインを、田園にアイディアを

熊本県

1994年２月４日 牛深市総合センターにて開催

K·A·P

くまもとアートポリスシンポジウム in 牛深

テーマ	アートポリスとまちづくり
日時	1994年2月4日㈮　14：00～17：00
会場	牛深市総合センター

参加者：約1,200名

主　催：熊本県

後　援：建設省、牛深市、熊本県市長会、熊本県町村会、(社)日本建築学会九州支部熊本支所、(社)土木学会西部支部「土木の日」熊本実行委員会、熊本まちづくり協議会、(社)熊本県建築士会、(社)熊本県建築士事務所協会、(社)熊本県建設業協会、(社)新日本建築家協会九州支部熊本建築家の会、天草郡市建設業関係団体協議会、牛深市漁業協同組合、JAあまくさ牛深市統括支所、牛深商工会議所、牛深市水産加工業協同組合、牛深青年会議所、牛深市婦人会連絡協議会、未来ぐるーぷうしぶか、牛深ロータリークラブ、牛深ライオンズクラブ、天草郡市KAPシンポジウム関連催し開催団体協議会、熊本日日新聞社、NHK熊本放送局、熊本放送、テレビ熊本、熊本県民テレビ、熊本朝日放送、エフエム中九州

くまもとアートポリスシンポジウムプログラム

主催者挨拶	福島譲二 熊本県知事
来賓挨拶	三井康壽 建設省住宅局長
	西村武典 牛深市長
プロジェクト紹介	
テーマ	**風景の中の橋、風土の中の街 ― 牛深漁港連絡橋とLandscapeのDesign**
講演者	岡部憲明 牛深漁港連絡橋担当建築家
テーマ	**建築の果たす役割について**
講演者	内藤　廣 牛深水産観光センター(仮称)担当建築家
パネル・ディスカッション	
パネリスト	岡部憲明
	内藤　廣
	姜　信子 ノンフィクション・ライター
	上川　肇 未来ぐるーぷうしぶか会員
コーディネーター	伊東豊雄 建築家

くまもとアートポリスシンポジウムｉｎ牛深

司　会　　ただ今から、熊本県主催によります「くまもとアートポリスシンポジウムｉｎ牛深」を開会いたします。

昨年度の国際建築展、「くまもとアートポリス'92」を含め、今回が第6回目のシンポジウムにあたります。今年度は牛深漁港連絡橋が建設中で、水産観光センターの設計が進んでおります、この牛深で開催することになりました。

それではまず、開催にあたり、熊本県知事・福島譲二の名代として、熊本県土木部次長山島哲夫がご挨拶を申し上げます。

主催者挨拶　山島哲夫（熊本県土木部次長）

本日は福島知事がまいる予定でございましたが、公務が重なりまして、私、土木部次長の山島から知事の挨拶を代読させていただきます。

本日は多数の皆様方、もう入りきれないほどの皆様方がこの牛深の地にお集まり頂きまして、どうもありがとうございます。牛深には私も何回かまいりましたが、非常においしい魚、それから素晴らしい風土、さらにこれから今、司会の方からお話がありました連絡橋、さらに素晴らしい建物が出来て、この牛深という街が熊本県内だけではなくて、世界へ情報を発進する素晴らしい都市になっていくんではないかと、そういう期待をしておりますし、この皆様方が集まってる状況を見ますと、そういう方向に牛深は発展して行くんだということを確信した次第でございます。

それでは知事から挨拶を受け取ってまいりましたので、代読させていただきます。

本日は、「くまもとアートポリスシンポジウム」に多数ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

建設省住宅局から松本浩建築指導課課長補佐、地元からは西村武典牛深市長、西岡勝成県議をはじめ、多数のご来賓の方々にもご出席をいただき、心からお礼を申し上げます。

さて、本県におきましては、まちづくり施策の一つとして、昭和63年から「くまもとアートポリス」構想を推進しているところであります。これは、後世に残し得るような文化的資産としての建築物や橋などを長期的視野に立って建設し、生活環境の質の向上に努め、豊かで潤いのある県土を創造していくためのものであります。これまでに、熊本北警察署、三角港フェリーターミナル、八代市立博物館などの公共建築物や、再春館製薬所女子寮などの民間の事業も含めまして45

件のプロジェクトが完成または進行いたしております。そして、ご当地牛深市でも本構想にご賛同いただき、「牛深水産観光センター」建設事業でご参加いただいており、本日ご講演をいただきます内藤廣さんによって設計が進められております。また、関西空港の設計者としても知られるレンゾ・ピアノさんをチーフとする共同体の設計によります「牛深漁港連絡橋」が建設中でもあります。この連絡橋についても、後で設計共同体のメンバーのお一人であります岡部憲明さんからご講演をいただくこととしております。

これらの施設が完成した暁には、水産業の振興はもとより、商業、観光への波及など牛深市発展の起爆剤になり得るものと確信いたしております。また、県の総合計画の中の地域計画においても、当地は天草生活圏の南の核として位置付けており、天草地域全体の発展にも大きく貢献するものと考えております。

このように、県内各地でプロジェクトが完成していく中、一昨年11月には、これまでのアートポリス構想の成果や県内の既存のものの中から選定された代表的な建造物、あるいは熊本の様々なまちづくり等を広く紹介する国際建築展「くまもとアートポリス'92 」を、県民の皆様方のご協力をいただきながら開催しましたところ、国の内外から17万６千人もの方々にご参加いただきました。また、昨年５月には、これまでの「くまもとアートポリス」の実績で、日本建築学会から自治体としては全国で初めて「文化賞」を受賞するなど、高い評価と注目を浴びております。

本日のシンポジウムは、この「くまもとアートポリス」構想をさらに多くの方々に理解していただきますとともに、この構想を積極的に取り組まれた牛深のまちづくりについて、多くの方々からご意見をいただきたいという狙いをもって企画したものでございます。県におきましては、21世紀を間近に控え、豊かさと優しさと地域文化にあふれた誇れる郷土づくりを目指して総合計画「ゆたかさ多彩『生活創造』くまもと」を策定するとともに、その実現に向けて最大限の努力を払っているところでございます。総合計画の基本戦略プロジェクトの一つであります「くまもとアートポリス」についても、県民の皆様のご理解をいただきながら息の長い県民運動として推進してまいりたいと存じますので、本日お集まりの皆様方には、今後ともなお一層のご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本日のシンポジウムが、実り多いものとなりますことを祈念いたしますとともに、このシンポジウム開催にご協力いただきました皆様方に心から感謝を申し上げまして、ご挨拶といたします。

平成６年２月４日　熊本県知事・福島譲二。代読。

どうもありがとうございます。

司　　会　　続きまして、ご後援をいただいております建設省から住宅局長・三井康壽様にご挨拶を頂戴いたします。

なお、本日は代理として建築指導課課長補佐・松本浩様にご出席いただいております。

松本様お願いいたします。

建設省挨拶　　松本　浩（建設省住宅局建築指導課課長補佐）

ご紹介いただきました建設省住宅局建築指導課の課長補佐をしております松本でございます。本日は、住宅局長がまいりましてご挨拶すべきところでございましたけれども、予算の関係が例年より遅れておりまして、２月10日が大蔵省原案の内示、２月15日が政府原案の決定という予定になっておりまして、この前段階に諸々の調整等々ございまして、本日まいれなくなってしまったところでございます。

挨拶を預かってきておりますので、これを代読させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

「くまもとアートポリスシンポジウム」の開催にあたりご挨拶を申し上げます。

現在の我が国におきましては、国民一人一人が生活の上で、真に豊かさを実感できる社会の形成が強く求められております。このため、文化性豊かなまちづくりや、質の高い住生活の実現など、生活者の視点を重視し、国民の行動、かつ多様なニーズに的確に応えた、住宅、社会資本の整備を推進していくことが重要な課題となっております。

このような状況のもと、さる１月26日には高齢社会の到来、及び障害者の社会参加の増進に配慮した優良な建築物のあり方について、建築審議会から建設大臣に答申がなされたところであり、建設省といたしましては、今後高齢者等の利用に配慮した建築物の整備の促進に向けて、必要な施策を積極的に講じてまいる所存でございます。

また、国民の高度かつ多様な要請に応えた、質の高い建築ストックが形成されるためには、的確に設計者が選定され、地域の実情に合った優良な建築物が、建築されていくことが重要であります。「くまもとアートポリス」構想では、設計者の選定から事業の実施に至るまで、構想全体にわたって協力を得ることで、景観の形成に配慮した優良な建造物群を創造していくという、全国にも先駆的な試みが繰り広げられております。

さらに、個性豊かに設計されたプロジェクトが核となり、環境デザインやまち

づくりに対する関心が県全体に渡って高まっていることは、地域の活性化や、よりよい生活空間の形成のため、大変意義のあることと考えております。

今回のシンポジウムは、「くまもとアートポリス」構想を、地域の数多くの人々に発表する場であるとともに、これからのまちづくり、住まいづくりについての提案をしていく場であると伺っております。この機会を通じて、ご参集の皆様が、今後、より一層まちづくりへの関心を深められますことを期待しております。

最後になりましたが、「くまもとアートポリス」事業のますますのご発展と、当シンポジウムのご成功を心より祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

平成6年2月4日　建設省住宅局長・三井康壽。代読。

どうもありがとうございました。

司　会　どうもありがとうございました。

それでは続きまして、今回のシンポジウムの開催に大変お力添えをいただきました、地元・牛深市長の西村武典様にご挨拶を頂戴いたします。

市長挨拶　西村武典（牛深市長）

ただいまご紹介をいただきました、牛深市長の西村でございます。

今日は熊本県の主催によりまして、シンポジウムを当地で開催していただきました。また、日頃牛深市のまちづくりにつきまして、全面的にご支援をいただいております熊本県ご当局に対しまして、まずもって厚くお礼申し上げたいと思います。

なお、今日は聴衆の皆さん方も、市内から約 500名、市外から500名、約1,000名以上の方々がご参集をいただきました。牛深にお出でをいただきましたことにつきまして、心から歓迎を申し上げます。

また、ご来賓といたしまして、先ほどご挨拶をいただきました、建設省住宅局の松本浩様にも、遠路はるばる牛深までお越しをいただき、心から歓迎を申し上げます。

さらに、本日講師といたしましてご講演いただきます、世界的な建築家の岡部憲明様、内藤廣様、またコーディネーターの伊東豊雄様、パネラーの姜信子様、上川肇様、それぞれお越しをいただき、お話しいただくわけでございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日のシンポジウムは、現在、熊本県と共に進めております、仮称ではございますが、先ほど知事さんの挨拶にもありましたように「牛深漁港連絡橋」、「牛深水産観光センター」、さらには周辺のウォーターフロント整備構想を広く

皆様にご紹介をし、お互いに議論を深めながら、21世紀につながるまちづくりを展開していこうという意味で、開催していただいたものでございます。

「牛深漁港連絡橋」につきましては、牛深の基幹産業であり、本市の生命線である水産業、この厳しい情勢の中で、何とかしてしなくてはという思いから、水産庁や県ご当局をはじめ、関係機関のお力添えもあり、熊本県の最南端の地牛深に 100億ものお金をつぎ込んでいただいているところでございます。現在、ご存知のとおり6つの橋脚が既に建ち上がっており、平成8年度完成を目指して建設が進んでおります。

この橋は現細川総理が県知事時代、最後の時期だったと思いますけれども、せっかく橋をつくるならば、ただ交通手段ということではなくて、将来、文化遺産として残るような立派な橋をつくるべきだというようなことで、先ほど話がありましたレンゾ・ピアノさん、ピーター・ライスさん、岡部さんまた日本の前田設計の共同体として設計を発注いたしました。設計料として5千万の県単費の金も出していただいた、素晴らしい橋だというように自負をいたしております。

この橋が出来ますと牛深までの新漁港から、国道へ直結することができ、水産物の流通に大きな効果が期待できるとともに、この橋のデザインが世界的に見ても美しい橋となるであろうということで、商業・観光面につきましても、大きな効果が期待できるところであります。

ご存知のとおり本日の講師としてお出でをいただいております、岡部憲明様に担当していただいております。また、この橋とともに水産物や農産物、特産品を展示・販売し、牛深の魅力を広く紹介する場として、牛深水産観光センターという施設を、市の単独事業として建設する計画を進めております。このセンターの設計を、同じく本日の講師であります内藤廣様に担当していただいております。

さらに、将来的には橋を中心とした周辺の水際を、魅力的で知的な牛深のウォーターフロントとして開発していく構想を進めております。近い将来におきまして、島原、天草、長島を結ぶ三県架橋構想が実現に近づくとき、牛深が取り残されないためには、今のうちから魅力的なまちづくりを図っていかねばならないわけでございます。

また、本日は多数の高校生もご来場いただいておりますが、一度は牛深を離れた人でも、いつかは牛深に帰って来たい。あるいは素敵な街なんだと自慢できるような、人が集まる街にしたいと願っておりますのは、私一人ではないと思います。市民皆様の総意と確信をいたしておるところでございます。そういった意味におきましても、これらのプロジェクトの成功が、21世紀の牛深市の姿を大きく

左右するものであると深く認識をし、全力を傾注いたしているところでございます。

本日は皆様にはお忙しい中ご出席いただきまして、本当にありがとうございました。どうか皆様が、本日のシンポジウムによりまして牛深の将来を描き、牛深を大きく動き出す、その原動力となっていただけるような実り多いシンポジウムとなりますよう祈念をいたしまして、地元市長といたしましてのご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

司　会　　西村様どうもありがとうございました。

それでは「くまもとアートポリスとまちづくり」をテーマにシンポジウムを進めていきます。

今回の構成は2部に分かれております。第1部では「くまもとアートポリス」の建築家の皆さんから、プロジェクト紹介を兼ねたご講演をいただきます。プロジェクトを通して牛深の街をどう捉えているか。これを併せて伺えればと思います。

そして第2部では、牛深でまちづくりを進めていらっしゃる方、熊本の市民代表の方に加わっていただきまして、身近な生活者という視点から、牛深の街、牛深の将来についてのディスカッションをいただきたいと思います。この話の中で有意義なまちづくりのアイディアやソフトが生まれればと考えております。

まず、初めは牛深漁港連絡橋設計チームのメンバーでいらっしゃいます、建築家の岡部憲明様のご講演です。

岡部様はイタリアの建築家レンゾ・ピアノ氏と協働され、パリのポンピドー・センターなどの設計をご担当されました。現在はレンゾ・ピアノ・ビルディング・ワークショップ・ジャパンの代表を務められてらっしゃいます。また、関西国際空港ターミナルビルなどを手掛けられるなど、国際的にご活躍中でいらっしゃいます。

本日は、「風景の中の橋、風土の中の街－牛深漁港連絡橋とランドスケープのデザイン」と題してお話しいただきます。

なお、講演の中でスライドの上映がございます。スライド上映中のフラッシュ撮影は、他のお客様のご迷惑になると思いますのでご遠慮ください。

それでは、岡部様よろしくお願いいたします。

ご講演　　岡部憲明（牛深漁港連絡橋担当建築家）

皆さん今日は。ご紹介いただきました岡部です。レンゾ・ピアノ、それから故

ピーター・ライスとともに、牛深の連絡橋のデザインに係わってきました。

本日、この連絡橋のお話を皆さんにしたいと考えています。実は1989年の7月に、初めて牛深の街を、ピアノとピーター・ライスとともに3人で訪れたわけですけれども、その当時は、我々いったいどういう橋をここにつくったらいいかというアイディアが、まだ確かにございませんでした。この景観を見たときに、これは大変なプロジェクトを引き受けてしまったんだなというのが、我々の最初の実感でした。

なぜならば、牛深の風景というのは非常にデリケートで、繊細な風景の中にあるわけです。同時に街のスケールも大変小さな、整った街のスケールであるわけです。そこに実際連絡橋というのをつくりますと、これは大規模な構築物、ちょうど東京でしたら首都高速、あるいは大阪の中央環状といったようなものの構築物を、小さな街の中に持ち込まなきゃいけないというのが、具体的に見るとそういう話になるわけです。この巨大な構築物をデリケートな場所に持ち込むためには、どんな論理を組み上げていったらいいだろうかというのが、我々の最初の課題になったわけです。

その時に、今からスライドでご説明申し上げますが、私ども歴史的な解析というのをまずやります。これは建築家がよくやる方法なんですけれども、土木の世界でもあることです。歴史的に橋というのはどうやってつくられてきたんだろうか。技術的にはどうだったんだろうか。ピーター・ライスという昨年亡くなった、世界でも最も優秀な構造エンジニアが私たちに付いておりまして、それからロンドンで世界最大のエンジニアオーブ・アラップ社、それから日本の、土木コンサルタントの前田設計、彼らとも相談をしながら進めてきました。最も大変な問題は、現代の総合的な技術を使ってつくることだけが、良いことではないということです。皆さんも日本のサスペンション構造の大きな橋、斜張橋、そうしたものをテレビや新聞、雑誌等でご覧になっていると思うんですが。こうした技術の栄光というものをまず前面に出した場合には、決して牛深のこの街には合わないのではないかというのが、我々の感想でした。

そこで私たちが考えたのは、なるべくこの橋を身近なものにする。近い所から見たらそれなりに親しみやすいものであり、遠くから見たら、それは風景を破壊しないものになるようにする。そういう一つの目標を立てました。

これから、歴史的なものを含めまして、皆さんにどんなプロセスでこの橋の設計をしていったかということをご説明したいと思います。ただ、目の前に、外に一歩出れば橋脚が、コンクリートの橋脚だけが立っておりますので、一番構造的

には力強い部分であると同時に、大きなスケールを持ったものが出来ています。これから先に橋桁が乗っかっていきます。その時に橋桁にどれだけの表情を与えられるかが、私どものデザインの中心になったテーマです。

それではスライドを使いながらご説明をさせていただこうと思います。

始めにヒストリカル（歴史的）なというテーマを言ったわけですけれども。ここに写真が出ていますのは、19世紀末のフランスでつくられたガラビの鉄道橋と言われる、土木史上残っている最高傑作の橋の一つで、つくったエンジニアはエッフェル塔をつくったエッフェルです。この時に初めてこの巨大な鉄骨構造の橋が、フランスでつくられていくわけです。この中でエッフェルという方は、デザイン上も、構造エンジニアとしても大変優れていたと同時に、自ら会社をつくってこの橋をつくり、その後にエッフェル塔をつくるわけです。

この歴史的な観点から私どもは多くのことを学ぶことができます。巨大でありながら、つまり高さが水面から 122mぐらいあるわけですけれども、こうしたものを巨大でありながらいかに繊細につくり、この時まだあまり解明されなかった、「風」に対する研究をエッフェルは続けてきたわけです。

これが皆さんよくご存知のエッフェル塔の一部です。エッフェル塔は非常にエレガントな建物で、300mの高さがあります。錬鉄でつくって、 7,000トンぐらいの鋼材を使っていますが、大変に精密な対数比によってつくられた構造体です。エッフェルはこの時、エッフェル塔を「この塔は立った、垂直になった橋だ」という表現をしています。

左手に見えますのが、エッフェルがオートゥイユという所につくった風洞です。エッフェル塔をつくった後に、エッフェルは風に対しての実験を最大限繰り返すために、エッフェル型風洞というのを発明しています。これは現在でもエッフェル型風洞と呼ばれて、自動車工業界その他に使っているものです。この後、航空機にも役立っています。

現在の橋の最大のテーマ、難しい技術的な問題は、風に対してどう抵抗していくか。風に対してどういう現象で、技術的に解決していくかということがテーマになります。

それから次に、これは今世紀の最近の橋ですけれども、スイスのいわゆるコンクリート橋です。ここでは何がテーマになってるかと言うと、道路です。道路というものが今世紀になって、大きな自動車によって使われだすことによって、巨大な構築物が自然の中に出てくることになります。ここは大変自然の美しいスイスの山の中で、いかに美しく道路を通すかという、それもしかもカーブした橋を

つくる努力がなされております。

風景の中に橋をつくる。その道路をつくるという光景が見られるわけですけれども、なるべくシンプルに、風景の中を横切るというデザイン的なチョイス（選択）が、これはドイツとスイスの高速道路なんですけれども、大変美しくなされているわけです。

これは左がパリのセーヌ川に浮かびますポン・デ・ザールという、ルーブルの目の前にある橋ですけれども、歩道橋です。右側がセーヌに架かる最も古い橋、ポン・ヌフという名前の橋です。ここでは右側は石造、左側は鉄でつくられた橋です。ここで材料、それからスケールというものが、いかに環境とマッチしてつくられているかを、一目でご覧いただける。この２つは私が一番好きな橋なんです。左のポン・デ・ザールもほとんど透けて見えるような美しい橋をつくっています。ここでは町のスケールに合わせるために、こういう橋がつくられているわけです。ただ、ここでご覧のように右側の橋は、16世紀ぐらいにつくられた橋ですけれども、自動車も通れます。大変強固な重い構造体で、左側は人間だけが通る軽い構造体のものです。ここで、橋が置かれている構造的な難しさ、重くすれば大変に力を受けるだけのものが必要だという、違いが見えてくると思います。

次に、これが牛深の街です。皆さんはよくご存知と思いますけれども、この左側の風景、非常に柔らかい山脈、それから島、そうしたものが見えてくる美しい風景の中に、16mの幅を持った大きな橋を 900mどうやって渡そうかと考えたときに、私どもは、まず単純でシンプルな１本のラインを引くことを考えたわけです。それは左の方に見えておりますけれども、ここの部分ですね。なるべく平面的に見ても１本の柔らかい線にしてしまう。それから立面的に見ても１本の線として表現しよう。

ここで斜張橋のようなもの、あるいは大きな巨大なストラクチャー（構造）のものを考えますと、まずこれは風景を破壊してしまいます。現在のいくつかのピア（橋台）が見えていますけれども、この上に橋が渡るわけです。

私どもは橋の形式として、 150mの柱と柱の間を抜ける、単純な桁梁を考えました。こうすることによって均等で、最も少ない数の柱を立てながら、最も単純な橋が渡せるからです。その代わりこの橋は三次元的にもカーブしています。柔らかいカーブを見せるということをまず基準にしました。

ここで、ちょっとおわかりにくいかもしれませんが、ここが立面で見た橋の姿です。風景の中をいかに橋を真っ直ぐに、素直に、ゆるいカーブをもって描くか。あるいは平面の中でひとつのきれいなカーブをもって描かせることです。これは

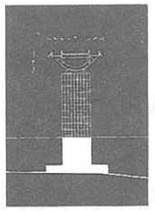
直線を曲げたりすると一度でその効果はなくなってしまします。まず、線形においてこうした効果を出そうと考えたわけです。

これがその当時の研究していた模型です。湾の中を横切る形態を、細かく分析したところのモデルです。これが他のもう一つ大きなスケールのモデルです。第１期工事ではここのランプの部分が付きませんので、こういった形態で橋が走ることになります。

その次に、私どもは 150mの橋を渡すためには、「橋の背」が、大変高くなります。５ｍほどの高い橋桁になります。それをいかにビジュアルに、小さく見せるかということを考えたわけです。それ以外に構造的な理由、様々な理由をもってこの橋の断面というものを考えました。

まず、柱にあたる部分ですが、ピアと呼んでいますが、この部分はなるべく単純なコンクリートの塊、単純な柱のようなものにしてしまいたい。それがなるべく風景の中に溶け込ませるように、なるべく単純にしてしまおう。その上に、ここに 900mの橋桁を連続して渡す、それがしかも空の上に浮いているようにしよう。

牛深でなぜこの橋が必要かということは、街の中を道路を走らせることは非常に難しいわけです。山が迫っています。街は全て一つのスケールで出来ています。そこで海の上に大きな大通りを浮かそうというのが、この計画だと我々は理解したわけです。これは橋と言うよりは、牛深の街の巨大な大通りが、宙に浮いているんだとお考えになっていただきたいと思います。この橋は、だから橋の上から街を見る、風景を見る、同時に橋自体も見られるという、相互作用の中に存在しています。



これ断面型なんですけど、変わった断面をしていますが、真ん中のこの部分に８ｍの幅で車が通ります。柱と柱の間 150mを飛ばす５ｍある橋桁のインパクトを小さくするために、この下を船の船底のように丸くしています。これは同時に風に対する抵抗を弱める効果を持っています。両側に歩道が付いていますが、この歩道は車道面から50㎝ほど下がっています。これによって歩道に立ったときには、車からは非常に保護された感じになります。同時に車からは風景が、妨害されずに風景が見える。走っていてもいい橋でございます。そして歩道の部分で「フラップ」と呼んでますが、「風避け板」を付けています。この風避け板を付けることによって、風の効果、歩道を歩く人を風から守る。同時に橋全体がひとつの風に対してエアロダイナミックス、風力学的な特性を持ちまして、橋全体が揺れないように工夫されています。

右側にありますのは、これは九州産業大学でテストしていただいた時の結果なんですが、橋がいかにスムーズに風に対して抵抗しているか。抵抗せずにスムーズに扱われてるかの、空気の流れを示しています。この下の丸い部分、それから上の部分のフラップで風が流れる部分。普通はここにカルマン渦というのが湧いて、橋自体を揺らしてしまいます。その効果をここの部分で解決しているわけです。風洞実験というのは、このエッフェルの時からずっと始まって、今の現代に至って、大変に優れた効果を持つような実験によって、橋の安全性が確かめられるようになっています。ここにある図面、ここにある写真が示すような、これ自体が橋のデザインに繋がっていくわけです。

左側の方はコンピュータでシミュレーションして、この橋がいかに一つの橋の梁の高さを持ちながら、柔らかいイメージで身近からも見えるということを示すために、コンピュータ・グラフィックでチェックをしております。同じようにコンピュータ・グラフィックを使いながら、橋のイメージ、この部分で橋桁のフラップがやわらかく光を反射し、同時に大変細かいディーテルをスケールとして与えることができます。

皆さんに想像していただきたいのは、ここに大きな柱のような鉄塔を立てて、そこからサスペンションブリッジを架けたことと、この柔らかい橋が１本のラインで繋がることの左右を想像していただきたいと思います。

これが橋の一部分の模型です。ここではフラップは上向きに風を避けるようになっていますが、同時に太陽の光を受けて反射します。白くキラキラと輝く反射板になります。この部分はそれを支える、歩道を支える部分です。そして丸い円型のボトム。これはなるべく小さくつくられました。コンクリートの、と言っても、この荷重をさげても割合大きなものですが、そして柱のこの橋桁を支える部分は支柱と呼んでいますけれども、ここはいかにも 900mの橋が空に浮いたように、はっきりと切り離された構造を持たしております。ようするにそのディテールを木の模型で示したところです。

これは時間帯、朝・夜・昼、そうしたもので表情が変わります。夜は、この後ろ側に明かりが取り付けられていまして、ここから上に向かって反射した明かりが、この歩道、この部分に反射しまして、歩道は反射光によって光らせられます。そしてその光は同時にこの部分にも当たって、橋全体が白く浮かび上がるように工夫してあります。これが歩道のディテールの図面なんですが、ここでいろいろ使っているマテリアル（素材）についてご説明いたしますと、私どもが使ってますマテリアルですが、橋は鉄の箱の橋です。その代わりこのフラップと呼んでい

る部分は非常に新しい材料で、カーボンファイバー、炭素系のファイバーを入れたコンクリートです。大変な強度を持っています。自由な形態を作れて、大変に薄く、軽くて、普通のコンクリートの３倍ぐらいの強度を持ったものです。この新たな材料を使うことによって、その上に現在使われている最も優れたフッ素系のペイントを塗りまして、大変、耐候性がある、同時に美しい姿で、柔らかい姿を持つような板をつくっています。これは外から見たら２m50㎝のピッチにあるんですけれども、それが輝いてバイブレーションを起こして、キラキラと輝く９00mのひとつのラインを、まあ真珠の首飾りみたいなラインだと想像していただければいいと思うんですけれども、それが巨大なスケールで広がっていきます。同時に内側、人が歩く側は、この柔らかい面、それは繋がってる面が大変柔らかい感触で、決してゴツゴツとした橋の中を歩いていない。まるでどこかの廊下の中を歩いてるような雰囲気をつくり出すことができます。

私どもはさらにもう一つの材料を開発しておりまして、このフラップを取り付ける材料は、鋳物で付けています。鋳物を使うことによって、柔らかい構造体というものをつくり出し、人が歩く部分はなるべくゴツゴツした橋のイメージではないものを工夫して、新しい構造の技術とデザインを探してきたものです。ここでそういうものをご想像していただいてもなかなか難しいので、これはひとつは同じような材料を使った、私どものつくった建物なんですけれども、アメリカのヒューストンにあるメニル・コレクションという美術館です。美術館の屋根に今の材料と同じような、セメント系の私たちが「リーフ」（木の葉）と呼んでいるものを使って、構造材であると同時に、これは光を反射して、中に落とし込むための反射板です。大変美しい効果をあげて、今までつくってきた建物の中でもなかなか良いものが出来上がりました。

同時にこれを支えている構造体なんですが、一緒に一体化して働いているのは、「ダクティル・アイアン」と言いまして、新しい形の鋳物を使っています。この双方が結び付くことによって、大変に柔らかい構造体、同時にそれが人間に親しみを与える、そうした効果を生み出しているわけです。これをさらに拡大して考えていったのが、先ほどの牛深のフラップのアイディアです。

これがメニル・コレクションの中の光です。反射板から流れてくる自然光が柔らかく落ち込みます。牛深ではこれを逆に反射することに使っているわけです。

これはパリのポンピドー・センターで、もう既に1977年に完成した建物ですが、ここでは鋳物が使われています。この鋳物を使うことによって巨大な建物、全体で10万㎡ぐらいある建物なんですけど、それを大変に軽く見せています。鋳物を

使うことによって人々が触れる部分、これは鋳物ですけれども、重さが10トン、長さが９ｍある鋳物でもって、巨大な橋梁構造を縦に５層に積まれたような建物をつくることを可能にしています。それでもゴツゴツとした鉄骨のイメージではなくて、非常に柔らかいイメージを与えるということを考えたわけです。

ここで、こういうシミュレーションをしながら、皆さんに牛深で使ってる材料の説明を私がやりたいと思います。

次に、今、行っています関西空港のプロジェクトで、これは牛深の連絡橋の始まった時と全く同じ時期に、国際コンペで勝ってきたものなんです。その時も同じようなテーマがありまして、巨大であるものをいかに人間的に見せるんだというのが、我々が関西空港で考えてきたテーマです。

これが現在、関西空港の一番最近の写真なんですけれど、島の長さは約 4,370 m、建物が 1.7㎞の長さの建物です。 1.7㎞、屋根面積が90,000㎡、これは大阪で言いますと本町から難波、九州で言うとちょっとわからないんですけれども。 1.7㎞というのは牛深の連絡橋がこれのちょうど半分の長さになります。非常に巨大な建物、世界最大級の巨大な建物です。この巨大な建物をひとつの造形物として見せる。同時にこれを人間のスケールと飛行機のスケールと、両方に対抗できるものにつくっていこうというのが、意匠的な、構造的な、あるいは形態的なテーマでした。

これが建物なんですが、端の方はほとんど見えないくらいになります。 1.7㎞、この前に33機のジャンボが止まる。６月に竣工いたしまして開港が９月、もう最後の現場の詰めに入っています。

ここでスケールということの話なんですが。人間のスケールとこの巨大な建物のスケール、これを結び付けるものは非常に緻密につくられた屋根のデザイン、それからガラスのデザイン、この上にはステンレスのパネルが82,000枚貼られています。全て同じ大きさを数学的に確実に貼り込んだものですけれども。ここでは、このステンレスのパネルが太陽の光を受け、反射を受けながら、朝は金色に輝き、夕方はまた金色に輝き、空が青いときは真っ青に見え、空が曇ってるときは真っ白に見えると、そういう表現を見せていくことができます。身近に寄ってみると非常にディテールがはっきりとした建物になっていて、人間のスケールでも飛行機のスケールにも対抗できるように、スケールの問題を解決しようとしたわけです。

これが大きな屋根の構造なんですが、横にパネルが貼られている所が見えると思います。人間のスケールを見ていただくと建物の大きさがわかると思います。

これが建物の内部の一部なんですが、「キャニオン」（峡谷）と読んでおりますアライバル・ホール（到着ホール）なんですが、ここは長さ 275m、幅28mあって、上下の移動、エスカレーター、エレベーターでの移動が図られますけれども、この中には植栽がこれから植えられます。実は、最近熊本に来まして、この中の植栽の一部には、熊本から楠を運ばせていただくことになっています。

これは4階の出発ロビーですが、この部分も不思議な空間ですけれども、いっさい上から明かりがありません。全て反射光でもって影のできない、そういう空間をつくっています。これもなるべく巨大な建物を、人間的なスケールに導くという行為を図ってデザインをしてきたわけです。

次に、また再び牛深に戻らしていただきますが、最後のテーマ、「まちづくり」です。あるいは「街と景観」ということです。先ほど私どもが橋をつくるときに、フラップというその反射板を付けながら、いろんな機能を与えて、同時にそれが巨大なものを小さなスケールの、人間のスケールでも対応できるような視覚的な工夫をしたと申し上げました。街で大切なことはそうした視覚的な工夫を、同時に生活の機能の中に入れていくことだと思います。

左側にありますのは牛深と近いような格好してますけれども、実は、これはジェノバという街の近くにあります、イタリアのサンタマルガリータという大変きれいな街です。我々が牛深に最初に来たときに、「イタリアの街と似てるね」という、レンゾともピーターとも話したんですけれども。その時は自然の風景スケール。サンタマルガリータの優れた所は、それを歴史的に積み重ねながら、少しずつその建物、建築をつくり上げていって、自然の風景の中にインテグレート、融合させていったという記録が残っています。現在見ると大変イタリアの中でもきれいな街をつくり上げています。

ここに大きな、多くの意味で牛深の街をつくるときの、いろいろなサジェッション（示唆）があるんではないかと思ってこの写真を出しました。これがサンタマルガリータの街です。建物自体の色の取り合い、建物自体はそれほど建築的にすごい建物はないんですけれども、そこに色彩、それから後ろに見える木々、植栽、それとさらに街の中には植栽を入れ、街灯を入れ、大事なことはペーブメントつまり歩道ですね、そういうものも大事につくることによって、大変に美しい光景を自然の中につくり上げています。

これはやはり港があります。ポルトフィーノと言ってサンタマルガリータのすぐ脇の街ですけれども、大変牛深に似たスケールを持っていまして、そこではアパート、そこに色彩、そうしたものを取り合いながら美しい街をつくってきているわけです。

これもそこの広場なんですけれども。小さな広場をうまく利用して街をつくっています。次にイタリアの広場なんですけれども、さんざん広場論というのは言われましたが。イタリアでは広場にいろいろなテクスチャーを与えて、いろんな人間的な活動がやりやすいようにつくっています。そのアイディアは牛深のような街には、大変入れやすいアイディアだと思っています。

左はローマのピアッツァ・ナボーナですけども、右側はトスカーナにあるルッカという街です。建物と同時に広場を活かして、そこをいかに使うかということを自由に工夫してつくっています。

これはやはりイタリアの広場です。これは市がたってる、マーケットが立ってる風景を出しています。パラソルをあげてマーケットをつくることによって、ひとつのまちづくりに活性化を与えながら、毎日の生活を楽しむという行為が、イタリアの街では行われています。

こうしたアイディアは牛深を考えていくときにも、確実に生き生きとしたまちづくりを考えなくてはいけません。さて牛深には二つの遺産があります。一つの最大の遺産は牛深の持っている風景、風土だと思うんです。もう一つは牛深が漁港として維持している活発な漁業だと思います。その二つの中にひとつのエネルギーと美しさがあるわけです。さらに、それに他から来た人達、あるいは牛深の市民にとっても、憩いができて楽しい世界をつくるために、大変大事なことは空間をいかにつくり上げるかということだと思います。都市空間を非常にうまくつくり上げてきたのは、イタリアの小さな都市国家群です。都市国家群はそれなりの権力を持ってたこともあるし、財力を持ってたこともあるんですが、大変大事に外部空間、自分が生きてる、生活してるのは決して内部だけではなくて、外部の空間、あるいは半分外部になったような空間、そうした部分を大切につくり上げています。

これが世界でも最も珍しいというか、非常に希少なイタリアの街をつくっていまして、ルネッサンス期につくられたものも、現在、確実に生活の中に溶け込んで使われているわけです。これが私の方からのひとつのサジェッションと言いますか、そうした時間をかけた、それでいて自分の住んでる家だけではなくて、外部というものを大切に組み上げて、まちづくりをしていただけたらと考えているわけです。

では、再び牛深の映像をご覧に入れて、私のスピーチを終わりたいと思います。ここで大切なことは少しずつ積み上げていく。牛深の街の街路、ペーブメント、

ベンチ、そうしたものを街でつくっていって、皆さんの建築自体に少しずつ潤い与える方法を、市民の皆さんが工夫していく。そして活性化されたいくつかの若い人達が来れるような、ある小さなアクティビティーでもいいからつくっていただく。そうすることによってさらに今言った風景と、それから牛深の活発な漁業のもたらすエネルギーとが、必ずや牛深の街を美しい、九州の中でももっとも美しい街の一つとして、発展させていくことができるんだと思います。

今回、内藤さんがここにくまもとアートポリス事業で、ひとつの建築をつくり上げていくことは、そうした意味で「橋」から、「建築」のスケールへとブレイクダウンしていきながら、だんだん街の中にそうしたものが芽生えてくるきっかけになるのではないかと期待しております。

これで終わります。どうもありがとうございました。

司　会　　貴重なお話をいただきまして、大変ありがとうございました。

それでは、引き続きまして「牛深水産観光センター」の設計を担当していらっしゃる建築家の内藤廣様からご講演をいただきます。

内藤様は、三重県の「海の博物館」や大分県の「オートポリス・アートミュージアム」などを設計なさり、1992年芸術選奨文部大臣新人賞や1993年日本建築学会作品賞等を受賞されるなど、現在注目を浴びている建築家のお一人でいらっしゃいます。

本日は「建築の果たす役割について」と題して、水産観光センターを中心にお話しいただきます。

それでは、内藤様よろしくお願いいたします。

ご講演　　内藤　廣（牛深水産観光センター（仮称）担当建築家）

内藤でございます。

今日はすごくたくさんの方が見えてるので、若干緊張してますけれども。大体、僕の言いたいことは岡部さんが全部言っちゃったようですけど。これから30分何しゃべろうかと思ってるところです。

水産観光センターのご説明をするということでもありますけれども、実は、今現在設計をしている真っ最中でして、もしご覧になりたい方はロビーの方に、設計途中の模型がありますので、それをご覧になっていただきたい。今日はスライドでお見せするようなものが、水産観光センターに関してはありません。

実は、今、外に置いてある模型は、全部の模型の中のごく一部でして、あの模型を作るまでに全部で10個ぐらい模型を作っています。それから、大きさの違う模型をいくつも作って、それでもまだもうひとつ自分としては納得していない所

があるので、大体、年内に設計を終わらせるという手順で、今、進めております。

今日、まずお話ししようと思うのは、たぶん地元の方が、かなり高校生の方も含めていらっしゃるんで、牛深というのは、外から来たらどんな印象かという、そういう所から少しお話ししようかと思います。

くまもとアートポリスコミッショナー事務局から第2期で、なんか建物を建てるというので、私の所に電話がありまして。まず「はい、もちろんやらせていただきます」というふうにお答えしたんですが。電話をかけてきた方々が「ともかく遠いですよ」というふうに言われました。「いえいえ、遠い所は、私は現場は慣れてますから大丈夫です」ということでお引き受けをして、それで牛深にやってきました。

やはり聞きしにまさる遠さで、野越え山越え、最初、美しい天草の風景に、ああきれいだなと思いながらずっとやってきました。最初の1時間ぐらいはきれいだなと思ってるんですが、だんだんその美しさが、美人も毎日見てると見飽きるということもありまして、だんだん退屈になってきます。そこからさらに2時間余り、山を越えると牛深の海が見えてくるということです。やっと着いたなという感じです。市街地を見ますと非常に整備をされていてきれいだと。それから海を見ると真っ青できれいだと。ただ、市街地がどこにでもあるものをちゃんとやってるというぐらいでして、何か、どうなるんだろう。このまんまこの街はどうなってくんだろうという危惧を抱いたことはあります。そこにレンゾ・ピアノの橋の橋脚が見えてきました。これは何かすごいことが起きる。

皆さん、今、プレゼンテーションを受けておわかりのとおり、レンゾ・ピアノというのは、私も学生の頃から憧れの人でして、パリのポンピドー・センターとかいろんなものを見て、素晴らしい建物だなと思ってきました。もちろん世界的な建築家であります。そのレンゾ・ピアノが牛深で橋をつくるという、そういうプロジェクトの噂を聞いたときに、さっそくそのプロジェクトの写真を手に入れて見ました。これは凄いことが起きる。本当に素晴らしいものができるんじゃないかというふうに思いました。私がまさかそのレンゾ・ピアノの橋が地面に下りてくる、その足元の所の建物の設計をやらせていただくとは、夢々思っていなかったわけですが。まあ凄いチャンスを与えられたなあというふうに思っております。

まあ、それじゃあ私は何ができるのかということを考えたわけです。建築というのは「ただの器」です。このホールだって人が入らなきゃあただの器に過ぎない。まあ入れ物ですね。だけど、やはり建築をやる中で、何かそこに新しい人の

生活だとか、地域の新しい営みだとかが、実現されていかなきゃいけないだろうと。たぶん、自分にできるのはその部分だろうというふうに考えました。

建築をシンボルだというふうに考える考え方もあると思います。ただ、牛深においてはレンゾ・ピアノの橋が、岡部さんのやられてる橋が、既に素晴らしいシンボルとして完成されることは、わりと容易に想像できることです。そうすると私のやる事は、それを地元の皆さんに繋げることかなあと。

先ほど岡部さんも広場の話をされていましたが、天駆けるそのレンゾ・ピアノの橋が地面に下りてきた所で、それを今度もうちょっと泥臭い所で、皆さんの生活にどうやって繋げるかということが、公共の建物ですから、まあそれが使命だろうというふうに、私はまず最初に考えました。それが新しい牛深の歴史をつくっていくことになるだろうというふうに考えております。

じゃあ、まあどういうふうに考えるかということですね。先ほどは岡部さんが橋のスケールの問題を言っておりました。確かにあれほどの橋、あれほどの長さのスパンを飛ばすと、橋というのはかなり普通は重たくて相当威圧感の強いものになります。それを大変なご苦労をされて、軽快で、さらにそれが美しく、新しい価値を生み出すような橋のフォルムにされてるわけです。橋のさっきフラップと呼んでいた風避け板も、人間のスケールに少しでも近づけようという、デザインコンセプトだと思いますが、それでもまだやはり今度、橋は橋ですから、人が集まる、先ほど岡部さんが最後にスライドでやられた、広場的な、皆さんが集まったり、いろんなことをそこでしたりする場所が要るんじゃないか。ないしは、おそらく橋が出来ると日本全国はもとより、世界中から人が見に集まってやってきます。そういう人達が居る場所がどうしても必要なんじゃないか。そういうものをつくろうというふうに私は考えました。

当初、市のほうでは、博物館と水族館とターミナルが一緒になったような、単体の建物を考えておられました。私が、実はお引き受けするときに、これは違うんじゃないかということを申し上げたんです。これはまあ建築家としては実に僭越な話ですが、ちょうど橋が下りてくる、そうですね、海に向かって左側の土地にその建物が、今の建物が建てられることになっておりました。ただ、私がまず最初に思いましたのは、そういうことではなくて、つまり外から来た人が牛深を知るというばかりではなくて、牛深の人達も一緒になって遊ぶ、何か元気が出るプロジェクトというのの有り方があるんじゃないかと。まず、それ無くしては牛深は変わらないというふうに考えました。

それで、模型を見ていただくとわかりますが、建物の全部を外に散らしちゃいまして、あそこの今、パーキングのある辺りまで含めて屋根をかけました。これは大きな屋根ですが、下はガラガラに空いている。つまり、今、港の反対側にあります水揚げ場がございますね、ああいうようなガランとした空間をつくる。その中にいろんなものを埋めてったらいいんじゃないかというふうに考えました。

それからフェリー・ターミナル、今、使っておりますフェリー・ターミナルも、これはまあ解体するというような話がありましたけども、私が見たところまだまだかなり丈夫に出来上がっていて、これももったいない。これもまあ何とかうまく転用する方法があるんじゃないかということで、その中に当初、博物館的なものを外につくる予定でしたけども、博物館的な、要するに牛深の歴史とか漁業とか、そういうものを展示するような空間をつくることにしました。

具体的には、本当はスライドがあった方がいいんですが、是非帰りに模型を見ていっていただきたい。模型はちょっと骨組みだけの模型になっておりますので、あれは実は屋根がかかって、屋根に光が入ってくるようにトップライトもあってということで、かなり簡略化した模型ですので、あしからずご覧になってください。

私がまず考えましたのは、外から来た者として、牛深は「魚の街」だと、漁港として凄いんだという話を聞いてましたけど。私が来たときは魚がどこにも居ない。魚屋さんもそれほど多いわけではないし、魚がどこにも見当たらないということで、魚を見たいと思ってたのに魚が居ない。この辺は何とかできるんじゃないかと思いました。

それから、実は私は三重県の鳥羽という所で、これはスライドをお持ちしていますので、後でお見せしますが、「海の博物館」という建物を、７年間かけてやってまいりました。これは、まさに漁労用具の、漁民のための博物館です。それをずっとやってきた関係で、海のことは知らないわけではないんです。牛深にもやはりそれに似た、つまり海の生活というのは、なかなか陸の人、陸と言うか、特に都会に住んでる人にはわかりにくいわけですから、わかりやすい回路をつくるような場所があってもいいんじゃないかと。

魚っていうのは見るだけじゃなくて食うもんだから、水槽をいくつも作って、この近海で取れる魚を置いといて、つまり、水揚げ場で一旦やるようなそういう水槽を作っておいて、それを子供達にも見せて、なおかつ、来た人達にそれを食べさせるというようなことを、やるのもいいんじゃないかと思います。

それから、水産加工というのは、普通は工場でやってるわけですけども、そういうものも実際、どういうふうに加工するのかというのを、みんなに見れるよう

にしてもいいんじゃないか。まあそんなことを考えました。そういう場所があれば外から来た人も、牛深の生活をわかりやすく見ることができる。そこに人が集まってくれば、当然そこから橋も見えるし、街の中心的な広場が出来て、街と橋も繋がりができる。そういうような考え方で建物を設計しております。もちろん公共の建物ですから、海際で大変塩害の強い地域で、すぐに金属系のものは錆びてしまうとか、いろいろございますから、耐久性は確保しなきゃいけないわけですが。ともかく開放的に、みんなが元気が出る広場をつくりたいというふうに思っています。

連絡橋をひとつのシンボル、街の新しいシンボルと考えると、これは、先ほど岡部さんが言われてましたように、自然地形であるとか、この場所の地勢的なものに対して、どういうふうに回答を出すかということだったと思いますが。私の方は界隈性というか、人とダイレクトに繋ぐ場所、まあ人間とか街並みとか、それからみんなが営み、生活を営んでいく、そういうようなものと繋げる場所というふうに考えております。私はこの２つのプロジェクトというのは、牛深の未来を大きく左右するプロジェクトと考えておりまして、これは責任が重大であるというふうに思っております。

それでは、あまり長く喋ると高校生の人達も眠くなってきて、寝てる人も何人かいるようだから早めに切り上げるとしますが。ひとまず、私のやった「海の博物館」のスライドをちょっと見ていただきます。

見ていただけばわかるように、実は、これは伊勢・志摩地方ですけれども、ここと実は地形が非常によく似てるんですね。日本のリアス式のいわゆる構造線の一部で、岩の種類も、よく似ています。同じみたいだなあと言いながら天草に来たのを覚えてます。

この博物館は、実は収蔵物が漁民の漁労用具を中心に、今現在３万点以上入っています。その内の 6,800点が重要文化財指定をされています。白いあそこが収蔵庫ですけれども、あの収蔵庫の中に入っています。手前の黒い所が展示棟と言って、収蔵されてるものを見せたりする場所です。これは収蔵庫のメインエントランスの、メインエントランスと言うか、風除室の所です。収蔵庫が全部で 600坪ぐらいございます。中に置いてあるのは、たぶん、ついこの間まであった漁船です。この中に今、船が50杯ぐらい大小入っています。手前にあるのが、今、見えてるのが鰹船、八丁櫓の鰹船です。これは、実はこの博物館に入る前は、ガラクタのようにみんなが見ていたものばかりです。この中には釣り具もあるし櫓もあるし、いろんな物が入っています。ただ、博物館の中にきっちりと収蔵物として置かれた途端に、それは何か歴史の、何て言うんだろう、歴史性を感じさせるようなものに変わります。

博物館の館長とよく話すんですけれども、これはせいぜい20年前とか30年前のものです。古文書の類は江戸時代のものもありますが、大体この博物館に入ってるものは２、30年前の物です。つまり、何が言いたいかというと、２、30年前の物が重要文化財になるような世の中って、いったい何なんだろうねというふうに、よく溜め息交じりに話します。

つまり、漁業が非常に激しい速度で、大体1970年を境に変質したということです。その1970年以前のものというのは、もう残っていれば文化財になってしまう。つまり、昔の沿岸漁業の、海と一緒に生活していた漁民の生活というのが、もう過去のものになりつつある。だけど、やっぱりいろんな知恵を出して海と付き合ってきたんだから、そういうものももう１回見直してもいいんじゃないかというのが、この博物館の基本的な有り方です。

建物の方は、これは非常にローコストで出来ておりまして、博物館も、それからこれに助成金を出した国も県も、お金が無かったという手前があって、非常にローコストに出来ています。ほとんど無駄な所がありません。

これは網です。やはり網も時代とともに麻であったり、縄の網があったり、それが近い方になると科学繊維が入ったり、そういうものを見てとることができます。一番大きい網で、ここで５kgぐらいの底引き網が確かあったと思います。

それから、今のは収蔵庫です。こっからは展示棟、先ほどの黒塗りの建物になります。これは、大きい大断面木造というか、大断面の集成材というものを使ってつくった架構ですが。非常に軽快に出来ております。中の、今、船が写っておりますが、これは八丁櫓の鰹船を、まだ三重県に３人木造和船の船大工が残っておりまして、それでも３人だけしか残ってません。その船大工に頼んで復元して作ってもらったものです。たぶん、これを作ってくれた船大工の親父さんも、年中酔っぱらって、一升瓶を横に置いて仕事をするような人で、もうだいぶお爺さんですから、あと10年もしたら作れる人が居なくなってしまうということだと思います。

それから、ここは太一というふうに書いてあるのは、あれは地元のお祭りに使う祭事、祭式の道具です。今、大きいものしかこのスライドでは見えてませんが、細々とした尼の生活であるとか、それから竹のビク籠であるとか、尼さんのアワビを引っ繰り返すヘラであるとか、実に面白い、まあ我々海民、海の民と呼んでますが、海民の文化がこの博物館に詰まっております。これと同じようなことを

牛深でやってもしょうがありませんけれども、牛深でついこの間まであったそういう生活を、もう１回見直してみるということもあるんじゃないかというふうに、僕は思っています。

これは先ほどの集成材の構造の一部のスライドです。これは博物館の夜の風景です。

あまり時間もありませんので、最終的にどうかというお話をしなきゃいけないことだと思います。私は、これはまあ私の考え方ですけれども、海の博物館をやる中で、実は地元の大工であるとか、いろんな方が協力をしてくれました。それで、どの方もこれをやったことを誇りに思ってくださいました。

つまり、何が言いたいかというと、建築というのは、出来上がったときに皆さんがそれを利用するんじゃなくて、つくる過程でも、その地域の営みという中で考えられるんじゃないか。つまり、みんなでつくってみんなで使うということが、大事なんじゃないかというふうに思います。

それは牛深でもやっぱり同じことで、水産観光センターにおいては、やっぱり皆さんの関心事の中でつくられるべきだと私は思っております。いろんな面白い企画がこの中で可能なんじゃないかと。それから、出来上がったらば、まあせっかく建築家に頼んで、普通のものは出来ないでしょう。何かしら時代を先取りしたようなものが出来るはずです。それを、それじゃあ今度どうやって利用するかということを、是非とも考えていただきたい。

先ほどプレゼンテーションのあった岡部さんの橋にしても、それから、私のやる観光センターにしても、これを使わない手はない。これをどうやって使うか。使わなきゃ損すると。まあドライに損得勘定で考えていただいても結構です。飛行機を使って東京からやって来て設計しているわけですから、せいぜいそれを使ってですね、皆さんが自分の得になるように、このプロジェクトを使っていただけたらというふうに思っています。

実は、私はこれで牛深が７回目ぐらいなんですが、なかなか天草を見る機会がなくて、実は、今回私は一人、昨日、一昨日と、天草をぶらぶら旅をしてここにたどり着いております。昨日は崎津に泊まりました。あそこに天主堂と、それから古い、まあもうちょっと壊れかけた民家、昔の遊廓跡とか、船入りの宿だとかいろいろあります。もちろん牛深と崎津は文化圏も違うし、風土も違うと思いますけれども。それを見て思いましたのは、ああ天主堂はレンゾ・ピアノの橋かなと。つまり、ヨーロッパ的な美しさが、この街並みの中に入ってくるということにおいては、崎津の天主堂というのは、実に街並みの中にうまくはまっている。

全然街並みとは違った姿なんだけど、うまくはまっています。景色としてもきれいにはまっている。そうすると私がやることは、その下に広がっている漁師街をやるのかなあと。そうするとうまく景色の中に２つともはまるんじゃないかというふうに思っています。

以上で私のスピーチを終わります。どうもありがとうございました。

司　会　　内藤さん、どうもありがとうございました。

お二人の建築家の話で、連絡橋、水産観光センターの概要、あるいはお考えというのがおわかりいただけたと思います。

それでは、パネルディスカッションに移る前に、10分ほど休憩を取りたいと思います。

ここで、事務局からお知らせがございます。１階の２階のロビーにおきまして、「くまもとアートポリス」参加プロジェクトのパネル展示を行っております。休憩時間をご利用してご覧ください。それから、入場時にお配りしました資料の中に、アンケート用紙が入っておりますので、是非ご記入いただき、お帰りの際に受け付けにあります箱の中に入れてください。

司　会　　ただいまから、パネルディスカッションを行います。

まず、出席者の皆様をご紹介させていただきます。

左からコーディネーターをお願いしております、アートポリスに参加しております、「八代市立博物館未来の森ミュージアム」などを設計され、毎日芸術賞を初めとして、数多く建築賞を受賞されております、建築家の伊東豊雄様。それから、先ほどご講演いただきました岡部憲明様。同じく内藤廣様。それから、右の方の机にお掛けいただいております、ご著書『ごく普通の在日韓国人』で、朝日ジャーナル賞を受賞され、新聞、雑誌にエッセイを執筆なさったり、ラジオのパーソナリティなどで、幅広い活動をなさってらっしゃいます、フリーライターの姜信子様。それから、一番右にお掛けいただいております、地元牛深でまちづくりや環境問題などのグループに所属なさり、「未来ぐるーぷうしぶか」では、昨年度まで事務局長を務められて、牛深のまちづくりに積極的に取り組んでいらっしゃいます、上川肇様です。

それでは、伊東様よろしくお願いいたします。

伊東豊雄　　それでは、先ほどの岡部さん、それから内藤さんのレクチャーを受けまして、これから約１時間半ばかり、ご紹介いただいた皆様方に、新たに上川さんと姜さんにご参加をいただきまして、まちづくりを中心にしました意見、アートポリスのお話を進めていただきたいと思います。

今、お二人の建築家にレクチャーをいただいたわけですけれども、今のお話を伺っておりましても、大変楽しみなプロジェクトが、この牛深という、私のように東京に住んでおりますものから見ますと、大変遠い所。先ほど内藤さんもおっしゃっておられましたが、私も初めてこの牛深へ今日まいりまして、相当日本の中をあちこち走り回ってはいるつもりなんですが、本当にこんな遠い所へ来たというのは、久し振りという気がします。車で熊本空港からご案内をいただいて、その牛深の街が山間の中から向こう側に見えてきたときに、本当に、ああとうとう来たという、何か大変感激のような思いがありました。

今の日本は便利になりすぎて、どこへでも半日ぐらいで行って来れてしまうので、逆に何かこういう時間がかかって来る場所というのは、非常にむしろ帰ってから印象深い場所になるのではないかと思います。そういう所へ岡部さんとそれから内藤さん、岡部さんの場合はレンゾ・ピアノという世界を代表する建築家の下で、大変素晴らしいプロジェクトが数年後には完成するというわけで、大変私も楽しみなわけですが。

先ほどのお二人のお話伺っておりましても、内藤さんは岡部さんが、「全部私

の言いたいことは言ってしまった」と言われたんですが、とんでもない、話を聞いてみますとまるで違う。同じ大学を出られて、わずか３、４年の年齢差しかないにもかかわらず、こんなに話し方も違うし、まあ顔が違うのはもちろんですけれども。天主堂と漁師街なのかどうかはわかりませんが、相当違うと。全く、まあむしろ対照的なんじゃないかというような気さえしたんですね。

それで、実はそういうことがこのくまもとアートポリスというプロジェクトの一番面白い所じゃないだろうかと思っています。つまり、アートポリスで既に45ぐらいのプロジェクトが進行、若しくは進行しているということですけれども、それらのプロジェクトがいろんなタイプの建築家、レンゾ・ピアノさんというようなヨーロッパからもやって来られる。それから、内藤さんのように、今、一番これから元気がついて、飛行機で言えば、離陸して加速がしかかったようなタイプの建築家と。それから、また地元の方々も何人も、大変素晴らしいプロジェクトをつくっておられると。そういったようなたくさんのいろんなタイプの建築家の方が、橋であるとか、水産観光センターであるとか、あるいは小さな公衆のトイレであるとか、様々なタイプの建築をやっておられると。それがもう点在していくわけで、そういうことは日本の戦後の建築の中でも、珍しい、特筆すべきプロジェクトだと思うんです。

そういったように我々、建築をやっております人間の間では、くまもとアートポリスというのはもう既に大変な評価を得ているわけですが。なかなかまあその一方で、地元に住んでおられる方々、あるいは地元で建築に携わっておられる方々が、どんなふうにこのプロジェクトを見ておられるのかというのは、我々が東京で考えているのとは、まただいぶ違ったお考えをお持ちなんではないだろうかと思います。

それで、今日は上川さん、まあこの方は地元で、特にまちづくりに大変積極的にかかわっておられるということですから、ここにおられる半分の、約半分という地元の方々は、皆さんよくご存知だと思いますが、そういう上川さん。

それから、また姜さんは、熊本に住んでおられて、かつ東京からやって来られて、熊本に移り住んで５年ということで、純粋、生粋の地元の方というわけでもないですし。それから、作家活動をしておられるので、ごくごく普通の主婦という方でもなくて、いろんな意味で非常に客観的にものを見られるというような立場におられると思いますので、そういったお立場のお二人を交えまして、建築家達が考えているアートポリスのプロジェクトと、地元の方達が考えておられるアートポリスのプロジェクトとは、どんなふうにクロスするのかということが、こ

のディスカッションを通じて見えてきたら、大変有意義なことではないかと思います。

そして、最後にはここに来ておられる、ご参加いただいた方々の中からもご質問をいただいて、それがこの牛深という街のまちづくりに繋がっていけば、大変な良いシンポジウムであったということになるかと思いますが。

とっかかりとして上川さん、姜さんから、先ほどのお二人のお話を伺って、まだできたプロジェクトではないので、なかなかお話しになりにくいかもしれませんが、そのへんをとっかかりにしながら、アートポリスであるとか、あるいは普段、建築について考えておられることを、語っていただければと思います。

それでは上川さんの方からお願いします。

上川　肇　今日は上川です。「未来ぐるーぷ」で地域おこし活動に参加しております。昨年度から「LOVE THE EARTH 21 うしぶか」ということで、環境問題、リサイクル等を活動させていただいています。

まちづくりに携わって、「日本一の大漁旗づくり」とか、牛深市への「生き生き提言集」とか、昨年度は大相撲の牛深巡業を主催したしたわけでございます。いろいろその間、スタッフとかいろいろさせていただいていく中で、やっぱりまちづくりというか、そういったものは、最終的には今の世の中の流れもですけども、物から心へというふうに時代が流れてきておりますが。その中で調和というのがやっぱり大切じゃないかなあと思うんですね。

くまもとアートポリスにしても、建造物云々がアートというか、ただそのハードだけがアートじゃなくて、そこに住む人もそのアートの心を持った、芸術を目指すという部分じゃなくて、感性とかあるいは人の優しさとか、愛郷心とか、密度の濃い地域のまちおこしを意識した、そういうアートの心を持った人がいると、その街というのはハードもソフトも、充実した街となるんじゃないかなという気がいたしております。

その中で人づくりというのがポイントになってくるんですが。例えば行政にもし「ふるさと課」あたりがあるとするならば、そこでいろんな市民の意見を吸い上げていただいて、また、情報もいろいろ提供していただけないかなあと。そして、行政マンはその行政の仕事だけじゃなくて、アフターファイブも利用していただいて、まちづくりに参加していただけたらと思います。そして、また市民はその行政に甘えてばかりじゃなくてですね、自分のできることは、自分の立場でできることは、例えば事業主としてできる、学生としてできる、主婦としてできるということがあると思うんで、その辺をお互い頑張って、今、牛深は本当に高

齢化社会で本当に問題だと思うんですね。後継者づくりもまた。そういったことも含めながら、このふるさと教育というものをして、中身の濃い人を育てていけないかなあと、今、思っているところです。

牛深の人達の性格というのが、どちらかというと開放的で、やっぱり一極集中型と申しますか、いろんなイベントなんかにはパァーッと参加して盛り上がるんですけれども、継続性が今一つないんじゃないかなあ、自分も含めてですけれども。その継続をしていくことがポイントだと思います。

そして、これからのまちづくりは、やっぱり、牛深はこういう素晴らしい自然というものが財産ですから、ハイヤも含めた牛深の自然、そして環境を考えながら、これからのまちづくりを考えるべきじゃないかと私は思います。以上です。

伊東豊雄　具体的にはどんなチームで、どんなふうにまちづくりの活動をなさっておられるのか。

上川　肇　現在は、昨年はもうほとんど大相撲に費やしてきたですね。

伊東豊雄　それをプロデュースされるチームといいますか、それは有志の方で、何か組織をつくっておられるわけですか。

上川　肇　組織っていうよりは、「未来ぐるーぷうしぶか」という地域おこしのグループです。

伊東豊雄　そのグループのことをもう少しご紹介いただけますでしょうか。

上川　肇　それはですね、「未来ぐるーぷうしぶか」というのは、前身が「21世紀若者懇話会」と言いまして、行政の呼びかけによって、当初は若者30人が集まってですね、設立されたんです。その任期を終えまして、民間の方にそれが主導が移ったんですね。その時に「未来ぐるーぷうしぶか」と命名して、その時にも地域おこし活動を継続するか、もうそれともそのグループを解散するかということだったんですよ。若干のメンバーは入れ代わったんですが、その後、未来ぐるーぷとして引き続いて、地域おこしの活動をやってるということです。

伊東豊雄　その未来ぐるーぷというような、未来というようなお名前を付けられたのは、何か特別な意味がおありなんでしょうか。

上川　肇　そうですねえ、21世紀若者懇話会のときからですけれども、将来を展望した牛深づくりをやっていこうということを、牛深に住んでいても知らないことが多いんですね。それは、まず研究、勉強して、提言しながらそれを実践していこうという形で、今、ここにきています。

伊東豊雄　そうすると上川さんぐらいの年代の方を上の方にされて、もっと若い方が？

上川　肇　当初、20歳から40歳までで最初は結成されたんですね。だから、当初、会長が

ちょうど40前ぐらいだったんで、今は40ちょっと出てるんじゃないかと思うんですけど。会長がですね。今、30代、40代ですかね。

伊東豊雄　そういう方と、もう少し上の方とは、あまりバッティングするようなことはないんでしょうか。

上川　肇　今、ＪＣ（青年会議所）さんあたりで、市内の連絡を取って、そういう各種団体が集まって調整するような方向づけにはなってきております。牛深市連絡協議会という所ができてですね。

伊東豊雄　そうしますと先ほど来のお話を伺っていると、まちづくりと言っても比較的ソフトの方が中心で、あまりハードの問題にはかかわっておられない。

上川　肇　そうですね、牛深は「ハイヤ節」がありますんで、遊廓、昔の遊廓がですね、牛深にもあって、そこで以前「ハイヤ節」の再現ということで、加世浦の人達がずっとそのハイヤ節を受け継いでいらっしゃるんで、その再現を、前もソフトを中心にしたことがあるんですね。

伊東豊雄　何かその「ハイヤ節」というのは、大変こちらのユニークなオリジナリティのある歌と踊りだそうですが。何か岡部さんのやっておられる橋に、ハイヤ橋という名前を付けようかという話もあったというぐらいの、牛深というとハイヤ節というのがあるんだそうですが。

上川さんあたりが地元にずっと住んでこられて、今度そういう新しいプロジェクトがつくられるということを、非常にストレートに、どんなふうな気持ちで受け止めておられるかというのを、ちょっと率直なところをお伺いしたいんですけど。

上川　肇　まず、橋脚が一番最初に、設計者の方を前にして申し上げにくいんですがが、大きくてまず気になったんですね。航行の妨げにならないかというその部分と、ブロックで、コンクリートがそのまま裸で露出されているということで。まだ上に橋が架かってないもんですから、ちょっと感じがわかんないんですが。

ちょっと前に長島の方に渡ったときに、フェリーから見ると、何となくだんだん遠くなると、その横のラインというものが何となく想像できてですね、ちょうど牛深の真ん中にそれが位置して、橋脚がちょうどゲートみたいな感じで、玄関口で、何か牛深の海を玄関にして栄えた文化にとって、本当に何かありがたい、アートポリスの構想だとは思っているんですが。反面、自然の調和なんかが、どうかなあと、そのへんも少し心配なんですけれども。

伊東豊雄　それでは、次に姜さんのほうから、先ほどのお二人のレクチャーを含めて、あるいはまた姜さんは熊本に住んでおられますので、他のアートポリスのプロジェクトなんかにも接しておられるかと思いますし。それからまた、実は姜さんとは、私は今日初対面ではありませんで、２年前ぐらいですかね、熊本日日新聞で、アートポリスにかかわる「往復書簡」という連載をさせていただいたこともございます。

その時にも、建築というのはいったい何だろう、というようなお気持ちを書いておられたような気がしますが、そのへん率直にお話しください。

姜　信子

大体、伊東さんと往復書簡したころから、くまもとアートポリスというのは個人的にも興味があって、いろいろと雑誌とか新聞とか、記事を眺めてきたんですけれども、どうも恐らく一般の方よりも、そういう形で関心を持ってアートポリスを眺めてきたほうだと思うんですけれども。それにしてもアートポリスの全体像が見えないというのが実感だったんですね。

例えば、アートポリスっていう言葉が、『知恵蔵』という現代用語を集めた厚い雑誌に出たとか、プロジェクトに参加した建築が日本建築学会賞を取ったとか、そういうニュースは入ってきたり。あるいは、街を歩いていると、熊本北警察署なんていうのは近所にあるんですけれども、パッと見えて。でも、それは全て私にとってはいきなり出現したものなんですね。どうやってその建物が出てきたのか、どういう過程で日本建築学会賞を取るに至ったのかと、どういうふうにして知恵蔵に出たのかとか。結果としてしか見えないというのが、実感として今まであったわけです。だから、大体そういう情報がない所では、悪いほうに想像はいきますから、行政と建築家の人達が、何か勝手にやってるんじゃなかろうかとか、悪い想像を働かすわけですね。

今回、こういうシンポジウムに参加するに当たって、実際にまた、今日この場に上がる前にいろんなお話を伺って、一つ気がついたのが、このアートポリスっていうプロジェクト自体が、人を動かすシステムになってるんですね。人を動かすシステムっていうのが、例えば一つの建築物をつくるために、内藤さん、岡部さん、伊東さんのような方々が東京からやって来る。大阪からやって来る。その個人的には一人の方が動いてるように見えるわけですけれども、そのバックに、背後に、いろんなまた建築関係の繋がりがあって、それで、これはものすごいことだと思うんですけれども、日本だけではなくて世界的に活動されてる方々がいろんな世界を見てきて、エッセンスを自分の中に貯めてるわけですよね。それが、はるばる牛深まで持ってこられると。そういう意味で人が動いている。

私もこういうシンポジウムを参加するために、熊本市内から牛深まで初めてやって来たんですけれども、また、別の意味で私も今日は動いてここまでやって来

たわけです。熊本市内からバスに乗ってやって来られた団体の方もいらっしゃるんですよね。そういう形でこの牛深という街にまた人がやって来る。いろんな意味で人を動かすシステムになっているんだなあというのを、今日実感したわけです。

もう一つ内藤さんのお話を伺いながら、内藤さんという人がこちらにやって来て、それで水産観光センターですか、それを設計するという過程を通して、新しい人間関係をつくっているんだと。今まで、牛深の中で完結していたまちづくり、街おこしっていう人間関係が、外の人間が入ってくることで、恐らくまた別の形になっていくんではなかろうかと思うんですけれども。そういう外の人間関係を持ち込む、外とその建築物がつくられる場所を繋ぐ、その媒介をする役割を持っている、そういう意味でのアートポリスというシステムがあるんだなあということを感じたわけです。

一つその中でやっぱり疑問であったのが、それだったらば何故そういうことが、今になってシンポジウムに参加するという意味で、ある意味ではそのプロジェクトの中に入ったわけですけれども、中に入らないとわからないのか。外にいると何故見えないのか。ものすごくダイナミズムのあるプロジェクトを進めているのに、それが伝わってこないというのは、何故なのかという疑問をやっぱり持つわけです。それは、恐らく建築物がつくられる場所と、その場所に住んでいる人達との間の、何か情報を伝える何かが欠けているんじゃないかということを、やっぱり素朴な疑問として感じたわけです。

例えば、これは質問なんですけれども、お三方の、今までいろんな建築物の設計をされたり、もう実際につくられたりしてきたときに、今日、例えば私は初めて、牛深でこういうプロジェクトが行われてるんですよというのを、具体的な話を聞いたわけです。実際に取りかかる前に、その前からどの程度地元の人達とコミュニケーションがあったのかと。どういう形のコミュニケーションが行われてきたのかとか。そのへんのことがものすごく気になります。

伊東豊雄　大変重要な問題がいろいろ出てきたような気がしますし、アートポリスとは何かという問題にも、かなりかかわり始めているような気がしますので。

私も八代ではずいぶん博物館、あるいはその後のプロジェクトを通じて、地域の方々とかかわっているわけですが。今日は、私は進行役ということで、そのあたり内藤さん、岡部さん、どちらからでも結構ですが、お話しいただけますでしょうか。

岡部憲明　それでは、今のご質問は、非常に建築家にとっては大事なことなんです。これまではほとんど海外での仕事が多くて、主にパリとイタリアで仕事をしてきたんですが。関西空港のコンペに入ってから、日本でここ５年ぐらい仕事をしてます。

特にヨーロッパと日本の違いが、まさにその点に一つありまして、ヨーロッパで、例えば「ポンピドー・センター」という建物をつくったときに、非常にしっかりとしたプログラムが既に競争設計に入ってました。それは、建物を建築家に渡す前、そのコンペの競争設計の規約をつくる前に、５年ぐらいかけて、現代の美術館は何かという研究が、いろんなレベルでされてます。これは市民レベルでもされてますし、調査のレベルでも専門家を入れて、ヨーロッパ中の専門家を入れてやったわけですね。そのプログラムが非常にしっかりしたものであることによって、我々が、例えば住宅をつくるときにはクライアントという、奥さんと旦那さんにお話をするんですけれども。公共の建物をつくるときには、建築家が皆さんに聞くというのは、これは非常に難しい作業です。そこで、行政の中でそうしたプログラムをつくってくれる人達が、例えばフランスの場合では非常にしっかりしたグループができてまして、かなり良いものをつくってくる。それから、建築家はそれに対して応えていく。応えていったときにまた遣り取りがあるという、そういうシステムになってるわけです。

住宅だったらどうするかというと、奥さんと旦那さんはかなり意見が違いますから、そのお二人を前にしながら調整をするという作業が、これを建築家はやらなきゃいけない作業です。大体ほとんどそこで分裂症的なことになるわけですけれども、それを纏めていく。ただ、公共の場合には、その調査、それからかなりの部分で、行政あるいはそれのためのコンサルティングが必要な部分があります。それは建物の規模、複雑度によっているわけですね。

例えば、今回牛深の橋の場合は、これが建築と違って橋だもんですから、大変我々も事情が違った所にありまして、まず機能性、あの橋をどう曲げてどうするかというのは、我々は意見を出すことがありませんで、ほぼ出来上がってる段階で。これは先ほども上川さんからあったように、僕も最初に巨大なものをあのスケールに入れるというのは、これは大変なことだと思いました。まず、我々には難しい課題が既に与えられてしまった。それを解決する所に集中したわけです。

今の姜さんのご質問に答えるとすれば、今までの自分がやってきた経験の中で、公共の建物では、まず行政を含めたプログラマシオン（プログラム化）と言ってますけど、そのプログラムをしっかり作っていただくということが、これは建築家が入ってくる前の段階で、非常に大事なことだと思います。

内藤　廣　私は、たまたまちょっと博物館以外に、まだ作品があんまり出来てないので、

先ほどスライドでお見せした「海の博物館」のことで申し上げますと。まず、最初の１年ぐらいは口も聞いてもらえませんでしたね、地元の方には。地元の方と言っても博物館に勤めてる学芸員ですけど、こりゃあ無愛想なやつらの中にきて仕事をしなきゃいけないなあと思いました。１年半ぐらいからまあ挨拶ぐらいですね。２年ぐらいになるとまあ二言、三言。でも、実は私は幸いなことに７年間、あれを全部やるのに、白い収蔵庫をつくるのに４年半かかって、黒い展示棟をつくるのに３年半かかりましたから、その間に実に良い友達になっておりまして、その長い時間が姜さんが言った参加というか、かかわりというのを実にうまく解決してくれた。それから、建築をつくる間にも、大工だったり左官屋だったり、そういう連中と皆もうツーカーになりまして。

だから何が言いたいかと言うと、本当は建築というのは、例えば50年とか 100年とか、町の中で残ってくわけですから、あまり短い時間でやらない方が、本当は好ましい。その建築家と、ないしはそのつくる人と使う人が、うまく馴染んでいく時間みたいなものが、建物に命を吹き込むんだと僕はずっと思ってます。

ただ、いかんせんいろんな行政の仕組みとか、いろんな中で、ある程度時間が限られますから、私が今、いくつかの公共の建物をやっていますが、できるだけ建築をつくる間にオープンにしたいと。決め込む時間をできるだけ後の方にもっていきたい。その代わり建築家の基本的な性能、例えば雨が漏るとか、風が吹いたらどうなるとか、そういう自然条件に対する基本的な答えだけは早めに出しますけれども、それ以外はできるだけ、ともかく地元のシステムというか、地元の人達がうまく入り込んでくるような仕組みをつくってやってます。

それからもう一つ、先ほど上川さんの話にも繋がるんですが、基本的に僕は、建物はただの入れ物だと最初に申し上げましたけど、思ってまして。上川さんが言われたように、人づくりというか、人無くして建物はただの廃墟ですから。

実は、市長に最初にお目にかかったときに、「私のやる仕事、水産観光センターはまず人です」と、「人をお願いします」というふうに市長に申し上げた。その人が、我々が設計していく中で育ち、我々のプロジェクトの中でいろいろ考え、一緒につくっていくというシステムを、ここ牛深ではできたらやりたいというふうに僕は思ってます。

伊東豊雄　ありがとうございました。

今のお二人の答えもだいぶ違うような気がしますし、先ほどのお話でも、私が大変違うと思ったのは、やっぱり何か内藤さんのように、国内で、日本でものをつくってこられた方と、岡部さんのようにヨーロッパを中心にものをつくってこ

られた方とに、違いがかなり明快に出ているような気がするわけです。

と言いますのは、岡部さん、つまりレンゾ・ピアノの事務所でつくる建築も、それから内藤さんのつくられる、まあレンゾ・ピアノという建築家も、あるいは内藤さんも、建築家の中ではですね、非常にフレキシビリティーのあるほうだと僕は思ってます。

つまり、その場に与えられた条件によって、どのような回答が、つまり、ハードとしての建築が、一番ふさわしいものなのかということを、かなり柔軟に見つけていくタイプの建築家であると思います。それにもかかわらず、そのつくられ方というのは、相当違うんじゃないかと。これをもうちょっとお二人で議論していただくと大変おもしろいと思うんですね。そのことは、岡部さん、レンゾ・ピアノさんのやり方は、一つ一つ、先ほどのプレゼンテーションでもそうですけれども、ここに橋を架ける場合に、どういう橋が一番風景の中で、あるいは技術的な問題、あるいは経済的な問題で、最適な解なのかということを、非常に理性的に見つけていくというタイプ。

それに対して内藤さんの方は、もう少しなんか一緒になって、人と話しながら「心で命を吹き込む」とさっき言われましたけれども、何か心を通じ合いながら回答を見つけていくというような、そういう柔軟性という、その違いがはっきり浮き上がってきてるような気がするんですが。そのへんヨーロッパでものをつくられるときと、日本でものをつくられるときの相手の違いみたいなことを、岡部さん感じておられますか。

岡部憲明　建物をつくることに関しては、ヨーロッパでつくろうが日本でつくろうが、ほとんど変わらないと思います。それが当然ヨーロッパでもいろんな国を僕等は相手にしてますから、フランスとイタリアは全く違う。イタリアとドイツは全く違う。アメリカにいたってはとんでもなく違います。

先ほど伊東さんが、特殊な部分で、全て我々は特殊解として出すということをおっしゃっていだいたんだと思いますけれども、特殊解として出すということは、何もその風景というか、敷地の違いとか、それから技術の違いとか、そういうことではなくて。やはり歴史的な違い、それからそこに居る人々の違いということは、当然意識して入るわけですね。そこであんまり内藤さんと我々のやり方というのは、そんなに違うとは私は思いませんで。当然、大事なことはフレキシブルであるということだと思います。

フレキシブルであるからといって、クライアントの言ってることをみんな聞きますと、ほとんど建築家は何もできなくなってしまう。そこでクライアントの言

うことは非常によく分析して聞いて、その上でできることを自分達なりに探していくということだと思います。建物は一つをつくるときには一つしかできませんので、これにいろんなことを全部入れてしまうということはまずできません。そこで、ひとつの特殊解、回答は一つしかないと僕等も思っておりますけれども、最適解を出さなきゃいけないわけですね。これは、建築家としては当然の使命だと思っています。

その時に、先ほど僕がプログラムの話をしたときに、私達自身が全ての情報を得ることはできないので、それは行政の協力があったり、プロフェッショナルな協力も必要なものが多いわけです。

これは、内藤さんは先ほど、博物館のときに時間をかけておやりになったとおっしゃってましたけれども、時間をかけてもなかなかできないくらいの、膨大な量を持つことも建築の中にはございます。そこの所は同じだと思います。情報量をどういう形でおさえていくかということで、それは皆さんと一人ずつ会って親しくなって、情報を得てということだけではなくて、やはり、そこには的確な情報量をいろんな形で得ていって、時代的な背景の下で、ひとつの建築家が、今この時代に何ができるかという回答を求めるということで、これは万国共通の建築家の使命だと私は思います。

伊東豊雄　ありがとうございました。

先ほど岡部さんが紹介してくださったスライドの中に、メニル・コレクションという光のきれいな美術館がありまして、あの建築は私も大変感激して見てきた記憶があります。それは、光が非常にきれいだと。それで、どういう屋根のストラクチャーをかけると、一番きれいに光が展示室の中に入ってくるかというスタディを、構造のエンジニアとか、他のいろんな光の専門家であるとか、いろんな方と協力しながら、さまざまなスタディを続け、それから、たくさんのモデルをつくりながら、ああいう回答に近づいていったと思います。

そういう、光が非常にきれいだということにまず感激します。それから、また実際には白いスチールとコンクリートの構造が、非常に目立ったかと思いますが、あの間には木がはめられていて、その木は周辺の街の色と、素材も合わせてつくられているんですね。それから、床も木で、黒く塗った木で作られている。そういういろんなその場に合った素材を持ってきて使われてる。

それから、また一番僕があの美術館で感激したのは、いろんな裏方にあるもの、日本の公共建築はほとんどがそうですけども、事務室とか、それから美術館の場合ですと、学芸員が居る場所なんていうのは、裏の誰にも見えないような所に置

いてるわけですね。できるだけ目に付かないようにしている。ところが、あのメニル・コレクションでは、学芸員が絵の修復なんかをしている作業の場所を、一番表に、通りに面した所、あるいは展示場を見に来た人に見えるように、ガラス貼りになって出来ておるわけです。そうすることによって美術館というのは、いったいどういう仕事をしている所なんだろうということが、やって来た人にも、街の通りすがりの人にもわかるようになってる。

それから、また収蔵庫なんていうのは、僕がつくった八代の博物館でも、絶対に一般の人は入れてもらえないわけですけれども、そういう所へも簡単に入って、しかも収蔵庫に入ると立派なテーブルがあって、そこでその研究活動ができるようになっている。つまり、その収蔵庫も展示室の一部のようになってる。先ほど内藤さんの海の博物館も、船が置かれて、たくさん置かれている収蔵庫自体が展示室も兼ねているという、そういう例もありますけれども。そのそういう構成にかかわる部分を、レンゾ・ピアノさんや岡部さんが、クライアントと一緒になって提案をしていく。そういう点ではその与えられたプログラムということではなくて、建築家もこのプログラムにかかわっていくということで、私は大変、あの建築がおもしろかったなあという思いをしております。

内藤さんが海の博物館でおやりになったことも、かなりそれに近いことをおやりになっていて、それで、今回この牛深でやっておられる水産観光センターについても、そういうことをやりたいんじゃないかなあと。だから、あんまりスライドで、今日は絵にしたものは見せたくないというような印象を受けたんですが、いかがですか。

内藤　廣　いや、そんな嫌がってるわけではなくて、伊東さんのご説明ですと、「理性の岡部」さんに対して「心の内藤」ですが、私にも理性はございます。

よく、いわゆるクライアントというか、使う人とか、それから発注者側と建築家の問題を、今、論じてるんだと思うんですが。実はですね、海の博物館はわりと整理された形をしてますが、あれの館長というのは、今日は本当にここに来てるはずだったんですけれども、これはもうわがまま極まりない人でして、ああ言えばこう言う、こう言えばああ言う、昨日言ったことは今日また違うことを言うという、そういう人です。それはもう一人で百面相を持ってるような人です。この人と付き合ってて建物が本当に纏まってくのかなあと思いました。その内に、まあいいや言わせとけと。 100個ぐらい言うと、何か大体言ってることの真ん中ぐらいに何となく正解があって、その部分だけ聞いてあげればいいのかなあと。まずともかく言わせるだけ言わせて、私は仕事をずっとしてきました。例えば、

よく館長に話をしたんですが、「あなたはいずれ死ぬんだ」と、こう物騒なことを言いますが、せいぜい生きて後30年、「僕はこのペースで仕事をしたら、あと10年ぐらいかな」とかって言って笑ってましたが。建物はやっぱり残るぞと、50年から 100年残るぞと。「あなたがやりたいとかこうしたいとかっていうことは、よくよく考えてみりゃあ非常に小ちゃいことじゃないか」と。つまり、「私はあなたのために設計するけれども、実はあなただけのために設計してるのではない」と。これは、僕が建築に対する基本的な考え方ですけど。

例えば、今日後ろの席に座っている高校生諸君、私はあなたがたのために建物をやってるかもしれないし、あなたがたの子供達のために設計してるかもしれない。だから、今、例えば地元の方がああしたいこうしたいと言っても、全部僕は聞くとは限りません。ただ、できるだけ聞きたいとは思ってますが。建築というのはそういう長い時間、今の人に満足を与えるだけじゃなくて、長い時間の価値に対してどういう答えを出すのかということだと思います。その意味では僕は岡部さんと、それほど隔たっていないのではないかと思っていますが。

伊東豊雄　私なりにアートポリスで行われてきたプロジェクトのことを考えてみますと、今までやっぱり他の場所では、公共建築というのは、ほとんど一般の人には触れられない所でつくってきたんじゃないかと思います。今のアートポリスでもそんなに、こういう機会があるわけではありませんけれども、それでもずいぶん今までの公共建築に比べたら、オープンになったんじゃないかなあという印象を、私は持つんですね。

今日なんかも典型的にそうなんですけれども。むしろ、まあ日本の場合には、役所で年度制というのがありますから、いついつまでに設計をあげて、いついつまでにというような、何年度という所で切られていくので、そこに収めるためには、かなり効率良く物事を進行していかなくてはならないということが前提になりまして。そういうことを役所の方も非常に慮って、あんまりそういう対話を続けていると、収拾がつかなくなるというようなこともあるんだろうと思うんですけれども。

なかなか一般の人達と話をする機会というのはない。ましてや若い世代の建築家にとっては、公共建築に携わるという機会すら、ほとんど日本ではなかったわけですね。それが、アートポリスというプロジェクトを通じて、初めて30代の建築家、あるいは場合によっては20代の建築家でも、小さくても公共建築の仕事に携われるんだ。それはもう今まで、他ではオープンコンペティションという、もう何百件の応募の中から選ばれるという、シンデレラみたいなことでもない限り、

ほとんどめったにチャンスは無かったわけです。それが開かれることによって、若い人にも、ひょっとしたら俺も頑張ってればできるかもしれない、というような希望が与えられてきたということは、まあ大変僕は大きな意味を持っていると思うんです。

普段、公共建築というものに対して、上川さんや姜さんはどんなふうに思って、どれほど日常の生活の中で、ハードとしてのそういった建築が、意味を持っておられるのかというようなことを、少しお話しいただけますでしょうか。

上川　肇　どのように思ってるかというのは、先ほどお話があったように、やっぱり後世に残るっていうことが、これからのこのアートポリスにしては、この水産観光センターや連絡橋を含めてその辺が重要なものだと思いますね。やっぱり我々だけじゃなくて、次の世代、また次の世代もあるわけですから、そういった受け継いでいくものは、そのソフトというか、ハイヤを中心にした海の文化と、そしてハード面、いわゆるそういう建物。そこでどういった人がそこに携わって英知を絞ってものをつくっていくか、その辺がやっぱりすごい、いつも気になってはいるところですけど。

伊東豊雄　姜さんはいかがですか。

姜　信子　そうですね、熊本のような例えば地方だと、建築工事っていったら、やっぱり公共建築っていうのが多いんですか。よくはわからないんですけど、そういう感じがあるんですけれども。例えばそういう時に、まあもっと大都市、東京とかあちらの方だと、民間でどんどんいろんなビルを建てていくわけですよね。いろんな個性的な。ところが、地方ではなかなかそういう個性的な試みができないというときに、公共建築という場所で、行政側の、「いいよ、何をやってもいいよ」みたいな形でポンと出してくれるっていうのは、ものすごく、ある意味でものすごく意味があることだと思うんですね。そういう意味で公共建築というのは、いろんな人が、不特定多数の人が対象だから、難しい部分ていうのは確かにあるんですけれども、逆にその公共建築っていう箱を提供することで、街の雰囲気、都市の雰囲気というのを引っ張っていくっていう、そういう方法もあるのかなあというのは感じます。

熊本市内で伝え聞くアートポリスの噂っていうのは、その公共建築が、やっぱりちょっと進んだ斬新なデザインだったりするんで、それに対する反発だとか、ちょっと行き過ぎてるんじゃないだろうかという、そういうあたりになるわけですよね。私は個人的には50年ぐらい行き過ぎた建物が、現れてもいいとは思っているんですけれども。そういうことをつらつらと考えています。

伊東豊雄　何か普段アートポリスということでなくてね、例えば音楽を聴きにいって、ああこのホールは嫌なホールだなあとかね。それから、ここの図書館へ行ったら、これは猛烈に何か入りたくないなあと、二度と行きたくないと思うような経験ありますか。

姜　信子　多目的ホールというのは使えませんねえ。

伊東豊雄　使えない？

姜　信子　使えない。

伊東豊雄　それは姜さんがご自分でお使いになるということじゃなくて？

姜　信子　自分で使うという意味でもそうですけれども、それを観客の立場で行くときもそうですけれども、多目的ということですると、例えば映画もかけられる、コンサートもできる、演劇もできるっていうような、いろんな多目的機能を兼ね備えてはいるんですけれども。結局、例えば具体的な話をすれば、映画を見るときには、こういう傾斜がやっぱり欲しいわけですよね。それがコンサートを主体でやってると、傾斜がないようなホールになってない。それで多目的だから何でも使えますよという触れ込みで、それを使って、後でああ失敗したっていう散々な目にあったのが数回あるんですけれども。

だから、何か変な具体的な方向に話がいっちゃったんですけど、そういう意味ですごく個性的な、この建物はこういう目的があるんですよという、ビシッと一本筋の通ったそういう個性的な建物の方が、いいんじゃないかなあというふうには思います。

伊東豊雄　なかなか日本の場合には、そういうある個性で突っ走るということが、難しい組織になっているような気がしますね。多目的というのもひとつ町で 800人のホールをつくろうとする。そうするとクラシックの音楽の協会からはこういう要求がある。それに対してまた踊りはこうだと。そういういろいろな団体の話を聞いていくと、結局多目的という形態を取らざるを得ないというところで、まあまあこれで我慢してくれっていうような、纏まらざるを得ないというのが現状で。

まあ最近ではお金のある町では、かなり専門化したホールを組み合わせてつくっていくということが、ひととおり多目的劇場の行き渡った、その次の段階としては出てきているわけですけれども。なかなかそういうプログラムの問題にかかわってくると、建築家のテリトリーを越えた問題が存在しているわけです。そのプログラムをどうつくっていくかっていうことに、なかなか関われないという、そういう歯痒さをいつも感じておられるんじゃないかと思うんですが。いかがですか。

岡部憲明　プログラムに関しては、建築家が参加するのは難しいんですけれども。一つは先ほど言ったことと矛盾してるように聞こえるかもしれませんが、やはりプログラムにも建築家が参加した方がいいと思います。

特に公共建築で難しいと思うのは、今、姜さんのお話しにあった多目的性というのは、民主的であるから、いろんな人の意見を入れて、みんなできるようにしましょうという、非常に単純な発想があるんじゃないかと思うんですね。

これは、例えば美術館についても同じだと思うんですけれども、日本の建築状況を見ますと、公共建築の中に一時期、市民ホールというのが出来て、市民ホールが循環して日本中全部出来てしまったら、今度は美術館をつくり始める。どこの都道府県でも美術館をつくっていって、その時、美術館の中に入れるものがほとんど無い。

例えば、ヨーロッパの場合だと、まず美術館をつくる前に、多くの場合、まず美術品のコレクションをやるわけですね。コレクションを何年も貯めていって、それから美術館をつくるという、中身を先につくっていこうというソフト型と言えるわけです。そこで、やはり美術館なり、日本における美術館なんかはどういうものなのかというのを、何も西洋のをやる必要もまたないんですけれども。その中で、じゃあ市民のみんなが、みんなの絵を展示するのが美術館なのか。あるいは非常に優れた作品をそこに持つことが美術館なのか。あるいは最も前衛的な若いアーティストを育てて、そこに入れるのが美術館の役割なのか。そういう問題が、非常に根本的な文化の問題として横たわってるわけですね。これからの日本の公共建築は、プログラムという言葉の下に、そういう部分がはっきりとみんなの前にさらし出されて、語られるべきではないかと思います。

「ポンピドー・センター」というのをつくったときに、非常にラディカルな建物をつくったわけなんですけれども、つくってる間に非常にみんなに非難されて、工場みたいな建物だからといじめられたんですけれども。あの中には、ある種の非常な前衛性があります。それは、フランス政府自体が、アメリカに持っていかれた現代芸術をフランスに取り戻すために、必死でその時やったわけですね。その時、最初の非難はあったんですけれども、出来上がってから10年以上、15年経ちましたから、そうするとフランス全体に、そういう前衛芸術に対する理解力が深まってしまったわけです。これは、建物のインパクトとプログラムのインパクトと、その活動がどんどん発展していくという大きなインパクトがあります。

美術館の中にも、日本で見ると資料室がほとんど無い。美術館の資料室っていうのは、皆さんが使うという大事な資料と、ある程度専門化して、本当にやらな

きゃいけない人達が使う資料室というのも必要なわけです。図書館も同じ問題を日本の場合には抱えていて、それは、市民の方達の理解がないとできないことなんですけれども。

同じ本が、この雑誌、この本がベストセラーで売れたから、その本が図書館には50冊並んでる。そういうことは、例えばヨーロッパでは考えられないことです。それ以外に非常に難しい本もあれば、選ぶ本もあるという、みんなが楽しめるものと、同時にきちっとした文化をつくっていこうとしたときに、大事なものをきちっと持っている。それが、都道府県であろうが市であろうが、そういうものを持ってくというとこの、文化の厚みということに、それが公共的であるということを考えてほしいなと僕は思います。

そうでないと日本で本を書かれてる人は、みんな大きな図書室じゃないけど、自分で本を持ってるわけです。誰も公開してないわけです。非常に無駄が多い。そういう所からやっぱり厚みのある文化をこれから育ててくということの中では、そういうポイントを大事にしてほしいと僕は思います。今の多目的性もまさにその部分に繋がってくるかと思います。

伊東豊雄　内藤さんはどうですか。

内藤　廣　プログラムっていうのは、要するに使い方というふうに平たく言ってもいいんですよね。これは、実は建築にとっては非常に難しい話だと僕は思ってます。特に、今、20世紀の後半の今の建築の凄く大事なテーマであり、一番難しい所じゃないかと僕は思ってます。

例えばそのプログラムをどのくらいのタイムスパンで考えるか。僕は、この間ある所に行って、プログラムは変わるもんだっていうふうに言った途端に、議論百出して大変だったんですけど。例えばもし10年後にプログラムが変わるんだったら、プログラムがいくら良くできてても、それに添って建物をつくることは、間違いなんじゃないかという話もあるわけです。だから、もしプログラムを立てるんだったら、非常に長い時間、例えば20年、30年経っても変わらないような大前提を、大きな所から僕は決めないと危ないんじゃないかと思ってます。

実は、今、新潟県で図書館をやっております。これは、その街、地方の街ですけれども、その街が20年来欲しくてしょうがなかった図書館です。いざやることになりましたらば、先ほどの住民の問題ですけども、小ちゃな委員会がですね、10個ぐらい出来ました。それを延々と議論百出して、ともかくプログラムを決めようとしたんだけど、ついに決まらなかった。結局、何をしたかと言うと、「僕はどういうふうにでもなるように建物をつくりますから」というふうに言ってやりました。これは、ある意味で多目的ホールの考え方と似てるんだけども、実は違うんですけどもね。

そういう、もっと自由な、建築をタイトルじゃなくて、もっと開かれたシステムを建築の中にできるだけつくっていけば、良いのではないかと僕は思ってます。このへんはちょっと意見が違う所かもしれませんが。

伊東豊雄　上川さんは、何かそういう建物の使われ方とか、今、お二人の建築家が言われたようなソフトの問題に関しては、何かございますか。

上川　肇　牛深に魚の街という話がありますが、魚の街ですね、確かに牛深にいて私もよく言われるんですね。ハイヤ祭あたりに来られて、やっぱり漁師の専門料理店というか、和洋中華風なやつをいろいろアレンジしたやつを食べたりとかですね。

それと、美術館の入れ物というか、さっき話を聞きながら思ったんですが。ちょっと以前、未来ぐるーぷの中で、提言集の中で、コピーがその封筒の中に入ってると思うんですが。このイラストなんですがその中で、これは5年ぐらい前に描いたイラストなんで、ちょっと環境面から考えたら、この久玉湾なんかを埋め立ててどうかなあって、これをたたき台にして、もう少し考える必要があるんじゃないかなあとは思うんですが。

この天附川にそのループ橋が落ちる、天附川に水族館を将来は設けたいと考えたんですね。それで、今の水産観光センターには美術館の入れ物として、魚の美術品を集めてですね、仮の水族館をつくってみたらどうかなあと思うんですね。魚のアートスペースっていう形でつくったらどうかなあと、私は考えています。続けてよろしいですか。

それで、この中で水産観光センターですが、いけすの話もございました。いけすは浅いいけすもできたら使っていただいてですね、資料としての博物館と、そして、そこに漁業の疑似体験をできるような、その水槽なんかを使ってですね。そういったものをプラスアルファで持っていけないかなと、私は考えるわけです。

それと、展望できるレストランというか、そういったものが一番要望が多いんじゃないかなあとは思うんですが。それでも船内風の室内をイメージしたようなレストラン、あるいは喫茶店なんかでありたい。もちろんそれは海鮮グルメを使ったやつですね。そして、できればそのカウンターを窓際のほうに持ってきて、窓際に向かって座ってですね、カップルなんかが夕日でも、また景色でも見ながら、眺望できるようなレストランなんかがあったらいいなと思っております。

これを描いたのもかなり前ですので、デザインも全然違いますし、天附川にループが落ちてないんですが。その連絡橋が、今度は牛深港の、漁協側の方にスロ

ープとして落ちていきますよね。あのスロープを利用して、あそこの湾全体を、海上イベントができるようなスペースとして、またそういうマーケットなんかがですね、朝市とかもできるようなスペース。あるいはやっぱりハイヤ祭りがですね、連絡橋を使ったハイヤ祭りであるとか、あかね市とか、その辺に持ってこれるんじゃないかなあと思うんです。

計画の中に恐らくあると思うんですが、デッキ状の遊歩道というか、そういったものをたぶん設けられると思うんですが。その中でやっぱり湾内を、漁火風の水中灯あたりでですね、ライトアップしてから、本当に幻想的な海を映し出してやったらいいんじゃないかなあという気がいたしてます。

それとですね、連絡橋を見たときに、横のラインというか、それが非常にきれいに出てくると思うんです。それで、今度は縦のラインというか、近くにあったらちょっとおかしいと思うんですよね。観光センター辺りに縦のラインがあったらおかしいと思うんで、このイラストの中には、イワシのシンボルタワーとして、インド瀬辺りにこれを設けておりますが、これが出来ないときには、現在の漁協辺りの岬、端っこに、イワシのもう少しデザイン化したものあたりができたらいいんじゃないかなあという気がしております。以上です。

伊東豊雄　かなり、牛深の具体的なご要望が出てきたわけで。じゃあこのあたりで地元の方もかなりおられるようですので、お二人の建築家、あるいは構築物に対するご意見やご希望みたいなものとか。あるいは牛深をこんな街にしたいというようなご要望とか。あるいは今までのことに対するご質問等ありましたら、どうぞ手を上げていただければと思いますが。いかがでしょうか。

はいどうぞ。

客席より　私は建築に関して全く素人なんですが、いろいろお聞きしたいなあと思って来たんですけれども。まず始めにせっかく天草に来られましたので、非常に豊かな感性を持っておられる方々だろうと思いますので、建築家の先生方にですね、その目で見た天草の感じですね、感想みたいなものを、教えていただければというのが一点です。

もう一つがですね、実は、私、学校に勤めてる者なんですけれども、この頃よく感性をみがくように勉強させてくださいというふうなことをよく言われます。それでよくわからないんですが、今日、前に来られておられる先生方は、相当素晴らしい感性を持っておられるでしょうけれども、いったいどんな勉強なされたんかなあと。私、小学校関係だもんですから、さっきのお話聞いてますと、建築家の方々のいろいろ考えておられることと、やっぱり難しいことはクライアントの側もある程度感性みがいとかんと、なかなか話できないんじゃないかなあと。何か雲の上でお話があってるんじゃないかなあという感じがするんじゃないかと思います。

それで、一般的な私みたいな者でも、勉強したいなあと思いますので、本当に思います。どんな勉強したらこんな風になるのかなあということですね。

それと、意見を一つだけですが、話聞いてますと、何ですか、先生方の頭の中には、アートですかね、美的なものと、それからもう一つは思想ですかね、考え方ですかね。それともう一つはやっぱり建築ですからテクノロジーですかね、技術、こういうものが非常に渾然一体となって建物をつくっておられるんだなあと。やっぱりすごいなあというふうな感想を持ちました。是非、二番目の質問には、何かお答えがありましたらお聞かせ願いたいと思います。以上です。

伊東豊雄　じゃあ真ん中におられるお二人の方どうぞ。

内藤　廣　壇上に立ってますがそれほど偉いわけじゃないんです。でも、外から来た人間の意見も聞いてみるかということで、一応聞いていただければと思います。もちろん、だから天草は天草の正業があって、みんな生活があるわけですから、それを外から見てきれいだ汚いだという権利は誰にもないはずで。ただ、僕が割りと短い言葉で言えるとしたら、天草の海には力があるということを言いたいと思います。

これは、ちょうど私が博物館をやってるときに鳥羽に通って、鳥羽の南の方に熊野という場所があります。熊野はいろんな伝承の地ですけれども、熊野の山には力があります。あそこには何か生命が出てくるような力があります。それと似たような印象を、海に対して牛深では持ったということを申し上げたいと思います。

それから、感性をみがくということですが、感性はそれぞれの人が持ってるものであって、何が一番誰よりも素晴らしいとか、そんな話は僕は本当はないんじゃないかと思います。できるだけ多くの人が賛同できるような美しさをつくり出すかどうかという問題であって、誰の中にもあるもので、誰でもが可能なんじゃないかと。だけど、日常みんな何となくそれに対して目を閉ざしてるだけで。いいんじゃないですか、ああ夕陽見てきれいだなと思ったりとか、その時にきれいだなと感動することを忘れたりしないようにしていけば、これだけ自然がきれいなんだから、感性は当たり前のようにみがかれるんじゃないかと僕は思ってます。むしろ濁るものを排除する、テレビの情報だとか雑誌だとか、新聞だとか、くだらない情報は排除すれば、自ずと感性は美しくなると僕は思います。以上です。

岡部憲明　　僕も似たような意見を持ってるんですけれども。一つ先ほど話した、実は牛深の橋、ピーター・ライスという世界トップの構造エンジニアと一緒にやったんですけれども、彼が牛深に、ピアノと３人で来る前に、僕ともう１人、山田という僕のスタッフと３人で来たときに、夕方、牛深の街を歩いてて、突如、彼がじっと座り込んで、「ここはベニスみたいだ」と言ったんですよ。僕はふっと考えて、どうしてベニスみたいなんだろうなあと思ったんですよね。その時に、それから座り込んでディスカッションになっちゃったんですけども、ベニスのほうが街としては、非常に凝ってつくった街ですから、一番イタリアのベニス共和国がリッチな時代につくられたものですから、建物は大変美しいわけです。ピーターは、ベニスは「やっぱり建築に関してはベニスのほうがきれいじゃないの」と言ったら、「いや、やっぱりここにはあるベニスに似たスケールがある」て言うんですよ。それからスケール論が始まって、今の橋をつくるときの理論の基本になったんですけれども。人間が住んで、海辺にいて水際にいながら、きちっとしたスケールを持っている。だから、街に関してそういうふうに見ていくと、街自体は、決して大きな街だとは思わないんですけれども、大変に複雑に入り組んでいて、リッチな街だという。これが我々が持った牛深に対する感想です。

そこに先ほどイタリアの街を皆さんにご覧いただいたんですけれども、そこに皆さんが街をつくっていく感性を、これからいろんな意味で、伝統的なものの中にも当然出てくるでしょうし、これからいろいろなものを見ながらやってくことの中にも出てくるだろうし、内藤さんがつくってくれた建築を見てく中で、どういうふうに出来てくるのかなあということでも出来てくると思うんですけれども。まず、基本的にはそのスケール感なり、街が持っている一番ベーシックな知性なり、そういうものがこの街にはすごくあります。周りには素晴らしい風景があるんで、そういう中で是非街をつくっていただきたい。

ただ、今よりもはるかに素晴らしい、皆さんが憩いができる街が出来てくるんだと思います。今でさえそうだと思うんですけれども、そのキャパシティーがあるだけに、もっとやってほしいなというのが、先ほど僕が述べた事項です。

それから、感性についてなんですけれども、これはとても難しい問題だと思います。いろんな感性がありますね。音楽を聴いて感性を。一番難しいのは、空間に対しての感性というのを身に付けるのが、以外と難しいんです。本を読んだりいろんなことを感じながらできるんですけど、空間というのはそこにいなきゃいけない。つくられなきゃいけない。

悪い例で言いますと、ひどい建物の中に入ってたら、ずっとそれで過ごしたら、

建物に関しての、空間に関しての感性は確かに悪くなるわけです。普通はヨーロッパのイタリアみたいな街が大事にしてる部分というのは、私もイタリアは３年ぐらい住んだんですけども、最初、２年ぐらい経ったら、あっこりゃイタリア人にかなわないなと思いだした部分が確かにあります。それはイタリアの街がずっと何世紀にもかけて大事にしてきたのは、その空間を大事にするということだったんですね。これはないがしろにできないのは、確かに内藤さんがおっしゃったように、ここには自然という空間があって、これは皆さんが感性を非常にみがかれるのに、あるいはその中で育まれるのに素晴らしいことだと思います。ただ、街の空間も大事にしてほしい。

子供達がだんだん育っていくときに、その空間から逃れられないわけですから、大人はやっぱりそういう空間をつくっていくという、やっぱりトライアルをしなきゃいけないんじゃないか。建築家の責任は、ひどい建物をつくったら、その建築家の責任は重大なのですね。絵だったらその絵の前で目をつぶればいいんですけども、建築の中では目をつぶったらみんな転んで倒れてしまいますから、建物の中では体全体で感じるんで、建築というのは大切なもんだし、その部分で養われる感性は、良い建物の中にずっといると、良い土地の中にいれば、それだけ感性は良くなる可能性はあるんだと思います。

伊東豊雄　　ありがとうございました。

姜さんの場合も、ここの街を初めて訪れたということで、その印象と。それからご自分で作家活動もしておられるので、その文章を書かれるときの感性のみがかれ方というのを、是非、私も伺ってみたいと思います。

姜　信子　　そうですね、牛深は今日初めて来まして、それから一年ぐらい前に天草を訪れています。まだ天草と牛深の位置関係さえ私、わかんないんですけれども。とにかくこちらのほうに来たのは二度目だということになるわけです。それで考えるのが、何ていうんですか、昔の人達、江戸時代の人達、例えば頼山陽なんていう人は、富岡の海岸に立てば、あちらの波は呉か越かみたいな、中国かっていうことですよね。そういう詩を残したり。あるいは、つい最近でも富岡の海岸に夕方立ってると、夕方の静かな時間に立ってると、上海の雑踏が聞こえるって。海の向こうから上海の雑踏が聞こえるわけですね。そういう話が本当かどうかわかりませんけど、伝えられてるわけですね。それで、ああこの天草っていう所は、海で外に繋がってる所なんだ。普通、日本という国に住んでいますと、大体東京が中心になって、陸路で繋がっているもの、鉄道で繋がっているもの、飛行機で繋がっているものっていうふうに私達考えがちですけれども、海を媒介にして、も

っと広い世界にこの天草っていう所は、繋がっていたんだなあということをすごく感じたわけです。

そういう印象を持っている反面、実際に牛深っていう街に今日来て、こぢんまり街としてきれいにまとまってますよね。これが始まる前に寿屋に行ったんですよ。寿屋に行ってバーッと全部見て、街ん中もブラブラ歩いて、ああ暮らすにはもう十分みたいな。だけどあとプラスアルファが必要なわけですよね。そのプラスアルファを考えなきゃいけないっていうときに、また上海のことが、2、3日前新聞で見た記事が出てきたんですけれども。今、上海はものすごく投資をする外国企業が増えていて、それで日本は出遅れてるんですけれども。ある香港のすごい大会社の社長が、「なぜ上海に投資するんですか」って聞かれたときに、「子孫に怒られちゃうから」と答えたんですね。日本の場合はリスクがあるから、ちょっと中国はって二の足を踏んでるところに、香港の人達は 100年後を考えて、「子孫に怒られちゃうから」。そういう印象をただ言ってるだけの話なんですけれども、今の天草、牛深に、そういう昔、上海の声を聞いてた人達が確かにいたはずなんだけど、今、海の方を見て子孫に怒られちゃうからって、 100年後を考えてやっていく、そういう気概っていうのはあるのかなあ。まだ、私はここに来て、12時に着いたわけですから5時間ぐらいしか経ってませんから、それを見通すことはできませんから、そのへんは牛深の方達が、いったいどうなんだろうというふうに、考えていただけたらいいなあというふうに思いました。

伊東豊雄　ありがとうございました。

じゃあ私もちょっとここで発言させていただきたいんですけれども。まず、牛深という街に初めて来させていただき、さっきも申し上げたように、街へ入ってくるときの印象が非常に強いですね。こういう海から、あるいは湖から船で近づいてくるときには、その街全体が見えますから、そういう街のシルエットを眺めて近づいていくという、そういう印象的な街っていうのは日本にもいくつかありますけれども。陸路をやって来て、それで街がパーッとほとんど全貌が見える街っていうのは、非常に少ないんですね。

スペインなんかを旅行していると、緑と砂漠の、オリーブの木ばっかりある中を走っていくと、突然、白い集落がパーッと現れてくるんです。そういう時に、ああ来た、というなんかすごい感激を味わうんですが。それほど劇的ではなくても、かなり山間の緑の中を走ってきて、それで、スロープでグーッと下ってくるその先に、海をバックにしながらこの街が見えるっていうのは、非常に印象的で。そういう意味から言うと、街をきれいにつくるのは勿論ですけれども、その前の

その緑の部分をうまく演出すると、もっときれいに見えるんじゃないかという、それは非常に安上がりできれいに見えるんじゃないかという印象を受けました。特に、夕刻入ってくるときなんかの演出の仕方は、いろいろあるんじゃないかなあという気がしますね。

それからまた、海を挟んで向かい合って、自分の街の人同士を眺められる所っていうのはなかなか無いんですね。これは大変面白いんで。最もそういうことで印象深い街っていうのはイスタンブールですよね。あれは何海峡だっけ、海峡を挟んで、もっと急な斜面で街が二つに向かい合っていますから、相手の部分が、対岸がものすごくよく見える。その中心にその海峡が流れているっていうのは、非常に面白い。いろんなことが面白いんですけれども。あの坂を下りてくときの印象は、非常に面白いんですけれども。それを、もうちょっと繊細なスケールでつくった街じゃないかというような。まあ街の中まだほとんど歩いていないんで、かなりいい加減な印象かもしれませんが、この街についてそんな印象を受けました。

それから内藤さんと同じように、小さい街にしては、漁港にやって来たときに、やっぱりエネルギーがありますね、ここはね。かなり外れにしては何か寂れた印象が全くないというのは、ちらっとここの会場へやってくるまでの間の店の感じでも、結構これは潤ってるなっていうような印象を受けました。

それと、その感性という話には私も全く自信はありませんけれども。ただ、私がいつも気を付けていることは、できるだけ既製概念にとらわれないで物を見たいということです。

例えばうちの事務所で最近コンピュータを使って図面を書きます。今までは全部消しゴムと鉛筆とで書いていたものが、ＣＡＤ（キャド）を使って図面を書くようになると、やっぱりちょっとそこでその考え方が変わるんですね。そういう時にやっぱりコンピュータは嫌だと、俺は手で書くことにこだわるんだっていう人と。それからそのコンピュータで書くことが面白いじゃないかというように考えるタイプといると思うんですが。僕はその後者といいますか、コンピュータで考えると、もうちょっと別のものができるかもしれないというように、楽観的にというか、そちらに乗ってみようじゃないか、そうすると今まで考えなかった思考法で、少しまた違った空間が出てくるかもしれない。

だから、子供が絵を書くときにも、テレビを見るのは止めなさいっていうんじゃなくて、テレビの中で何が面白いかっていうこと、その絵を書くことに繋げていくというような、そういう方法でものを考えられたらという、私はそういうふ

うに全てを肯定的に考えようと思ってます。

ですから、今回、牛深にこの新しい二つの建築が、一つは橋ですから建築とは言えないかもしれないですが、そういう時に、よくこういう街へ行って、私なんかも言われるのは、地域にそぐわない建築をつくらないでくださいよと。地域に合った建築を、地域性ということをよく言われますが、そのことをこの街でアートポリスというプロジェクトに参加されたということは、私はある意味では非常に勇気があるというような気がいたしますが。その地域を考えるということが、つい何か非常に古いものにこだわると、新しいものを排除するという方向に流れがちであると。出来てしばらく経ってから、ああこれはこういうことだったのかということが見えてくるというようなケースが往々あるんで、こういう機会を通じて、皆様が持っておられる疑問はできるだけぶつけてみて、そして、新しいものを受け入れていただきたいという気がいたします。

他にご質問おありでしょうか。はいどうぞ。どうぞ。

客席より　内藤先生にお聞きしたいんですけれど。

先生が設計されている牛深水産観光センターに期待しているんですけど。時間的ハンディですね、牛深の場合遠いということ、牛深は魚の街というイメージで来たけど、魚が無かったという話をされました。そん中で、我々市民としても、なんか本当にあるものをうまく活かしきれてないんじゃないかていうことも思うんですね。だけん、岡部先生の設計されたその橋で、そして今度は内藤先生の設計される水産観光センターの中で、リピーターを、もう一度来てもらうようなきっかけづくりをしてもらうというのは、我々市民が願ってることの一つだと思うんですね。

そん中で人づくりまで自分は歓迎したいということを先ほど話しされましたけど、具体的にどういう形の中で、そういうソフト面についてのかかわりを考えておられるか。それと、牛深らしさていうですかね、ポリシーというか、何かそういうものが、どういうものが我々市民の役割として必要なのかということを、お聞かせいただけたらと思うんですけど。

内藤　廣　大変本質的な問いだと思うんですね。まず僕は、まあお答えになるかどうかわかりませんが、牛深の朝ですね、朝市というか、水揚げをあさの6時かなんかに起きて見に行ったときに、あそこに漁船がたくさん入ってきて、人が働いて、魚が、ものすごい新鮮な魚がキラキラ光って揚がってきて、それでしばらくすると朝陽が上がってくるというね、あの活気とバイタリティーはねえ、僕は素晴らしいと思いましたね。

私も漁港を知らないわけじゃありません。伊勢・志摩というと、本州のほうではかなり漁業の中心地ですけれども、比較にならないぐらい牛深はなんか生き生きとしてる。それも漁業が沿岸漁業に近い形で生きてるっていうのはね、これはものすごい売り物なんですね。ものすごいことだと思うんですよ。にもかかわらずそれは朝が非常に早いので、観光客はほとんど見るチャンスがない。じゃあそれを昼間の時間帯に、何とかあのエネルギーが出てくるような場所をつくったらいいじゃないかというのが、私が市長に提案していることです。

どうやってつくるかは、実は一緒に考えてってもらいたいんですね。これは、例えば鮮魚をどうやって、まあ何日ぐらい置いとくとか。先ほど上川さんからあったように、浅い水槽で疑似体験するとか。それから、それをそのまま捨てちゃあもったいないから、それをそこで食うとか。それは、みんなで考えてってもらいたい。

実は、僕は、そのへんに関しては僕が提言するよりも、皆さんからアイディアをいただいて、皆さんでどうやって運営していくかということを考えていただきたいと思ってます。まだまだ時間がありますので、できるだけそういうチャンスを作りたいと思います。

それからもう一つ、牛深の魚はうまいんだという自信を持っていただきたい。このうまい魚をここで食わせない手はないと。この魚を食いにみんなやっぱり来ると思いますよ。半端な肉ばっかりみんな食ってますからねえ。特に都会は魚がまずい。都市の人間をどうやってここに呼んでくるかっていったら、もう魚しかないと思いますね。だから、それもみんなで宣伝して、みんなやって来て、ここで水槽眺めてこれ食いたいって魚食って、元気になって帰っていくみたいな。牛深のエネルギーを都市のやつに分けてやって、ぐらいのつもりの方がいいかと思いますけど。

伊東豊雄　はい他に。はいどうぞ。

客席より　このシンポジウムはですな、大変結構でした。私が言いたいのは県の主催だったでしょ。内容は牛深のことばかりじゃないですか。なぜ牛深市との共催にできなかったかというとを残念に思います。

ショッキングなことを申します。牛深漁港連絡橋ですね、これに対する一番前列に座っておいでの市長さんの発言が載っております、朝日新聞8日にです。牛深市長明かす、海底地盤が悪く、完成は2年遅れ、地盤が悪いのはわかっております。調査のミスです。橋が出来てもですよ、牛深は埋め立てすれば、必ず地盤が沈下します。引っ張られます。橋も重大なことを引き起こしますよ。そういう

ことをですね、よお考えてしてもらわんば、二度と取り返せないことが起きますよ。一考を要します。終わり。

伊東豊雄　ありがとうございます。

今のご質問、ご質問というより、ご意見。ただ特に今のご意見に対して、岡部さんはですね、新関西空港で、これはもう地盤沈下が大変問題になってる所で、あの大きな建築をつくっておられるわけで、そういうことに関しては、もう日本で一番のプロと言ってもいいんじゃないかと思うんですね。そのへん大丈夫だということを、ちょっと一言おっしゃっていただけますか。

岡部憲明　そうですねえ、沈下その他について、橋で一番大事なのは上に見える部分は確かにそうなんですけれども、一番大事なのは基礎工事ですね。これは大変大切なことだと思います。今回の場合はきちっとした基礎工事を当然やっておりますし、はっきりとした技術的な裏付けも、技術検討委員会もやっているので心配はないと思います。

ただ、関西空港の場合には、これはとんでもない20mの海を埋め立てたものですから、地下の20m以下、 400mの層というのは、予測が非常にできなかった部分というか、予測はしてたんですけど、予測値が何メーターも違うくらいの予測値があるわけですね。そういう問題をかかえてました。それもいろんな科学技術の進歩で、そういうことを乗り越えてきましたし、現在沈下に関しては全く問題がないという所までたどりついてきたわけです。

牛深の橋の場合は、これは橋梁の専門家が全部入って、私自身は技術者ではないんですけれども、詳しく地盤を調べ、それにふさわしい基礎工事をしておりますので、橋に何か問題が起きるということは、設計者サイドでは信じておりませんので、是非ご安心していただきたいと思います。

伊東豊雄　ということでございます。

そろそろ時間になりましたが、もうお一方ぐらいどなたかありますか。

よろしいでしょうか。

客席より　私、東京からまいりました。アートポリスの阿蘇の山頂のトイレのお手伝いをちょっとしたりして、トイレを専門に仕事をしております。今ずっと知性と感性とのお話が続く中で、先ほど上川さんからお話しの中で、この街の元気とか、開放的という中で、継続性の、人々の継続性っていうんですか、物を持っている継続性みたいなものが、あまりないみたいなお話が出たんですけれども。街に何かが出来るときって、トイレってすごく大事になってくるので、ここの街の公衆トイレとか、トイレの動きみたいなものがどんなのかということと。それから、もしもどちらかの先生、あるいは内藤さん、今度の建物に何かトイレの構想がおありだったら、お聞かせいただいてもいいかなと思って、大変恐縮なんですけど、トイレのお話になってしまいましたが、よろしく。

伊東豊雄　上川さん、いかがでしょうか。

上川　肇　トイレの何ですかね。

伊東豊雄　街のトイレについて、何かまちづくりの中で、そういう公衆のトイレであるとか、公共施設のトイレであるとか、そういうことについて何かご意見とかありますか。

上川　肇　そうですねえ、デザイン云々っていう前に、やっぱり公衆トイレに対しては無責任ていうか、使用する人が無責任だと思うんですね。鏡が割れてたり、ドアがガクンと傾いたりということで。やっぱりまちづくりっていうのは、思うんですが、その街並みとか、その例えば牛深を自分の別荘とか自分の家と考えてですね、まちづくりを進めたら、そういう公共物も大事にするだろうし、いろんな夢って広がると思います。以上でよろしいですか。

伊東豊雄　建築家お二人の方はいかがですか。

岡部憲明　橋の上には残念なことにトイレが付いておりません。これは男の人は何をするか、おそらく想像はつくんだけれど。今東京でも出来てきてますけども、パリなんかでもトイレは有料化が結構進んでるんですね。これはトイレをきれいにするために有料にしてるんですけれども、パリのポンピドーの広場の前で見てたら、１フランを入れてトイレに入るようになってるんですね。

ある日見てたらパリはルンペンの人が多いですから、ルンペンの人が立ち小便をそのトイレに目掛けてしてるわけです。それも何か見てたら非常に滑稽で、やっぱり公衆のトイレって、日本は非常にきちっとしてて、無料でだんだん成り立ってきたんで、こうしたモラルはどんどんきちっとしてくるのかなと思ってます。

そして、東京でも最近見かけるのは、トイレのデザインがきれいになってきてるわけですね。すっきりしたもので。パリの場合だと、昔、男性用にはエスカルゴといって、カタツムリのような格好をした目隠しの付いたトイレがあって、これがなかなかチャーミングだったんですけど、だいぶ無くなってきました。やはり、トイレは先ほど僕が話したときに、電気だとか街灯だとか、そういうようなものが街の中の雰囲気をつくってきますというお話をしたんですけど、あと舗道ですとか。トイレも同じような要素があって、やはりそうしたものとしては、街の景観をつくる一つと考える。きれいな所では割合皆さんきれいに使うもんだというふうに考えています。

内藤　廣　　トイレですね。私がやります水産観光センターでは、観光客の方に、たくさん食って、たくさんお金を落としていただいて、落としていただくのはお金ばっかりじゃなくて、たぶんウンコも落としてくでしょうから、きれいなトイレをやりたいと思ってます。

たぶん、冗談半分で言いましたけど、都市で暮らしている人達て、割りとトイレに関しては贅沢をしてる。もし観光ということで考えれば、やっぱり特にトイレをきれいにしないと、なかなか観光地のイメージは上がらない。むしろ観光地のレベルのバロメーターはトイレにあると僕は思っています。

実はいろんな建物を見に行ったりするときは、僕は必ずトイレに行きます。それで、伊東さんの建物なんかを見に行ったときも、トイレはどんなかなと思って、小便だけはして帰ってくるということをやっておりますが。やっぱりなかなかよく出来ている。

牛深全体そういう施設がまだ足らないので、できたらそういうもののサンプルになるようなものを、私の仕事の中でやれたらと思ってます。

伊東豊雄　　ありがとうございました。

今、ご質問された坂本さんは、日本でトイレ、街のトイレについての意識を高めるための第一人者で、昔、僕も他の何人かの建築かと集められて、お前はトイレについて何を考えているかということで、大変厳しく詰問をされたことがありまして、「建築家ってみんな何にも考えてないのね」と言われた記憶がありますが。それからまあ少しずつ勉強した記憶があります。

何か近々熊本でトイレの展覧会をおやりになるそうですので、またこれを機会に、まちづくりの中でトイレのアドバイザーとして、いろいろお知恵を貸していただけるかと思います。

最後にトイレに皆さんそろそろ行きたくなったころで、まあここでそろそろということですが。十分なご意見を言い足りなかった方もおありになるかとは思いますけれども、建築が出来るプロセス、これから出来るプロセスでこういう議論が行われたということは、大変例の少ない有意義なことであったと思います。こういう大きな舞台でなくても、内藤さんもそれから岡部さんも、ちょくちょくこっちの街に来られておられるようですから、そういう機会にまたお二人を捕まえて、いろんなお話を伺ったり、疑問をぶつけたりされてはいかがかと思います。

今日は長時間ありがとうございました。

上川　肇　　申し訳ありません。終わったところで申し訳ないんですが、私から皆さんにお願いというか、提案がありますんで、申し訳ありませんがちょっとだけ時間をください。よろしいですか。

今年は国際家族年でございます。このまちづくりっていうのも、この家庭の中でどうか話す機会があったら、それぞれの立場で、この牛深っていうのも盛り上がっていくんじゃないかという気がします。

それと、情報ということで、今、新聞、テレビなんかでは、いろんな中央の情報は自分の所に入ってきますが、地元の情報がやっぱり不足してるんじゃないかなという気がするんですね。そこで、このようなシンポジウムをですね、持ち帰っていただいて、自分に関わる人達に、このまちづくりを触れていただくという、そういう口コミのマスメディア的な役をしていただいて、その生活そのものがまちづくりというか、そういったものになったらいいんじゃないかなあと。そして、10年先、20年先、自分が、ああ本当に牛深に住んどって良かったなあと。子供がまたその親に対して、ああ牛深に住んどって良かったという、そういうふうなまちづくりができていくような、その層の厚さ、厚みを持たせるような人づくりが必要なんじゃないかなという気がします。以上です。

伊東豊雄　　はいどうもありがとうございました。

司　　会　　どうもありがとうございました。

パネラーの皆様、長時間にわたりまして貴重なご意見いただきました。誠にありがとうございました。それでは、これでお終いになりますけれども、もう一度拍手をお願いいたします。

これをもちまして本日のプログラム全て修了いたしました。先ほどご案内申し上げましたが、お手元のアンケートをご記入の上、受付の回収箱にお入れください。

今日はどうも「くまもとアートポリスシンポジウム」参加ありがとうございました。気をつけてお帰りください。

「くまもとアートポリス」事務局
熊本県土木部建築課内
〒862熊本市水前寺6-18-1
電話096-381-8912